ASUKA COMICS DX

ファイアーエムブレム™

C 1990 Nintendo

2

MASAKI SANO &

佐野真砂輝&わたなべ京

KYO WATANABE

ASUKA COMICS DX

ファイアーエムブレム™

2

MASAKI SANO &

佐野真砂輝&わたなべ京

KYO WATANABE

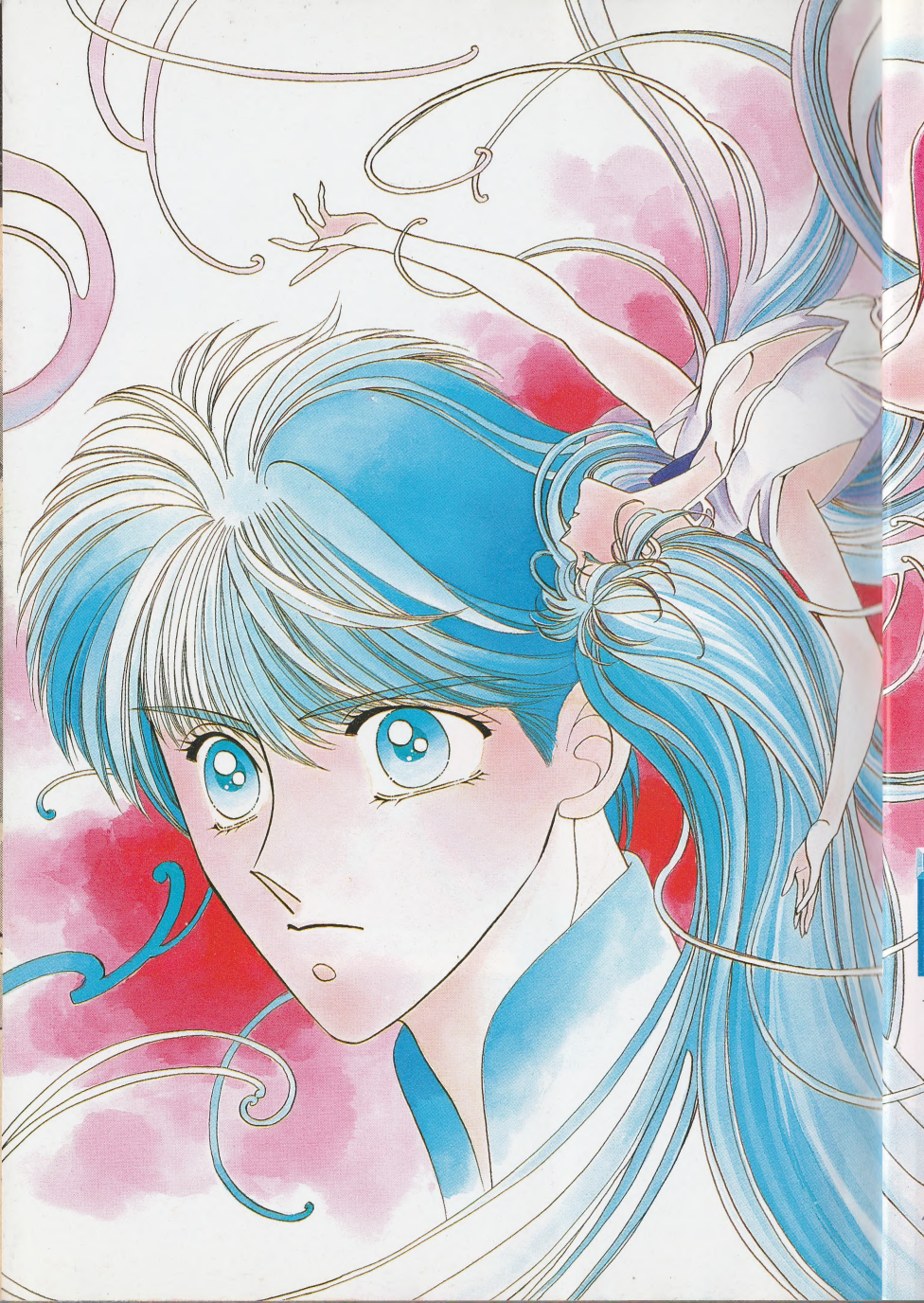
C O N T E N T S

Design: EIICHI SUEZAWA

あれは間違いなく
楽園の記憶
これから どれだけ
時間が重なって
いこうとも
二度と戻らない
永遠の現実

ファイアーエムブレム™

第３話

風刃(ふうじん)

そも　この大陸は
彼らのもの
だったのだ

竜から人へ
人から竜へ
自在に変化する
彼らを後に
大陸に生まれ出た
新種族の「人間」は
竜人族と呼んだ

人の姿で地上に
降り立つ時
竜の力は
石に変わり
知識となり
「力」となった

思うままに
雲を運び
雨を降らせ
雷を呼ぶ

この大陸の主として

ほら今日も
砂の結界を
通って
魔道士さまが
仲間を連れて
お国へ帰るよ

戦乱の故郷を
救うために

彼らの種族の日々が満ちたりたものであるようにと魔法は行使された

夜の闇を照らすための炎
怒り狂う火の山を鎮めるための氷

この砂漠の国から出てゆくよ

この魔道の国カダインから

人間たちは彼らの力を恐れ敬い教えを乞うた

この魔道士の学ぶ砂賢院から

自分たちの日々もまた満ち足りたものであるようにと

かの力はかくの如く使うべきものであったのだ

少なくとも伝説の中では

そこにおるのか マリク

はい

あいかわらず熱心よのう

いえ まだまだ学ばなければならないことが多いものですから

謙遜するでない マリク

偉大なる魔法の力を己が力としようと人々が集う この魔道の国 砂漠のカダイン

大陸の北西 砂嵐の結界なくとも晴れる日とて少ないこの国

その中でも貴公は一番年若いのにその知識を得る速さときたら

いえ あの

多いものですから

それで御用はなんでしょうイーザン先生

私の出発の日が決まってな

申し訳ありません何度もお断わりした通りぼくはまだまだ未熟者なので

イーザン先生と共に戦場に出ても足手まといとなるばかりでしょう

ぼくはカダインで勉強を続けたく思います

御武運を

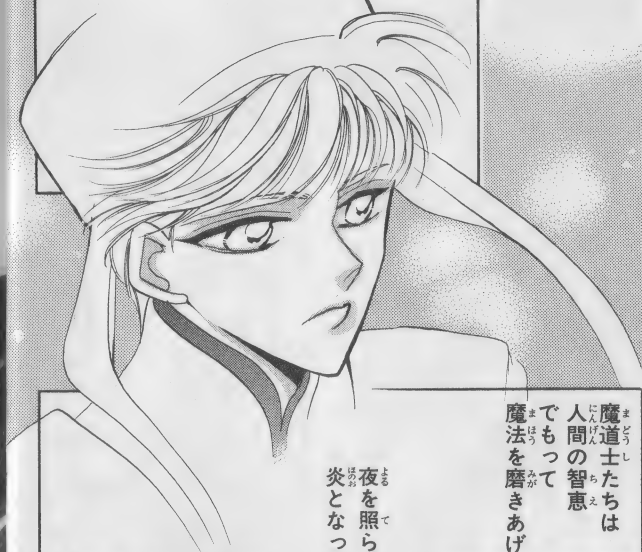
——いやまったくマリクはなびかぬ

国王づき親衛隊並みの待遇だと言ってもだ

パラ

竜人族から得た
魔法の力は
人間総てが
使えるわけではない

魔力は心に従う
故に人間総てに
魔力は存在するが

その魔力を
魔法に変える
人々のことを
魔道士という

魔道士たちは
人間の智恵
でもって
魔法を磨きあげ

夜を照らす火は
炎となった

ひとりでも
多くの魔道士が
欲しい

どこの戦場でも
魔道士は
大きな戦力と
なるからのう

思いのままに
敵を焼きつくす
ための

雷も氷も
総てが武器と
なった

雷も氷も
総てが武器と
なった

武器は
進化する

より多くの血を流すために

だがマリクは
その余りある才能を
魔力の鍛練ではなく
最近では何かの
研究に使っておる
様子

どれだけの魔法が
使えるものやら

それに
故国のために
戦おうにも
マリクは
マリクの国は

その人間たちに
絶望したのか
あるいは
種としての限界か

竜人族は
その姿を消す

それは
人間の歴史の
始まり

連綿と続く
悠久の時

彼らは総じて
長命であり
その肉体は
竜の姿においては
無敵だと
いう

だが今の
人間の時代において
残るのは
魔法の知識と
伝説のみ

マリクの国は
英雄アンリの国
神剣と碧い風と
緑の大地の
アリティア

ドルーアに
真っ先に滅ぼされた
――

この大陸の
どこかに
生き残る竜人族

深い眠りの中に
封じられた
竜王の娘

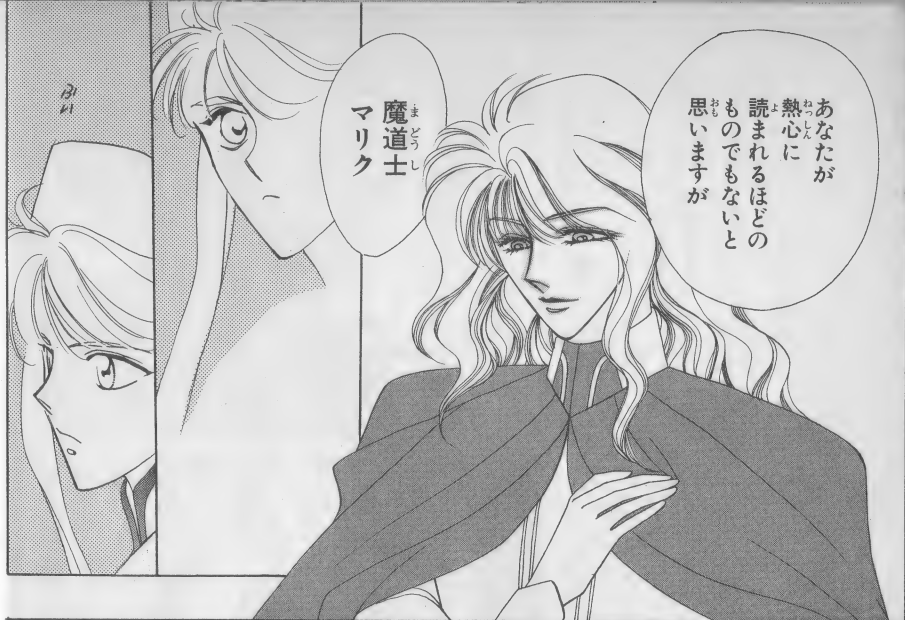
我々のための
竜王の
大いなる遺産

そして
あまりに

ぴく

――
あまりに
危険すぎる
ために

竜王が禁呪とした
いくつかの魔法

それすらも
伝説にすぎぬのかもしれない
この魔道の国カダインにおいてさえ
その禁呪の存在を確かめることは難しい……のだから
は
「カダイン前史」ですか
ばっ
古代アカネイア語で記されているうえに偽書の噂も高い歴史書

あなたが
熱心に
読まれるほどの
ものでもないと
思いますが

魔道士
マリク

ほら
ごらんなさい

今日もカダインを
去る人たちが
砂漠を往く

自分の国を
救うために
戦場へと
魔道士たちが
赴いてゆくのです

!

ぱり

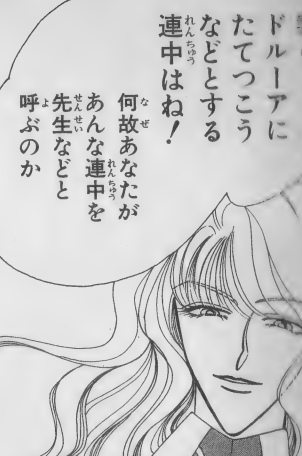
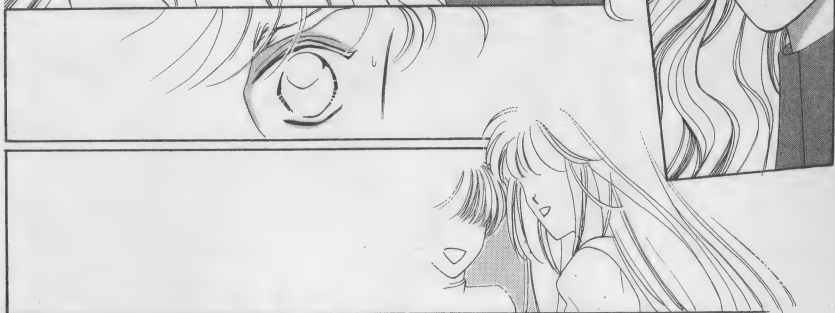
戦場で
彼らの国と
戦っているのは
どこだと
思ってるんだ

魔道士
エイナス
あなたの国

ドルーア帝国
だ!!

伝説の竜人族
メディウスと
大司祭ガーネフが
復活させた帝国

マケドニア竜王国と
グルニア王国を
喰った国!

そう そして！

アリティアをも
屠った
史上最強の帝国

先にあなたを
誘っていた
魔道士のような
雑魚どもが
かなうと
思いますか？

イーザン先生を
雑魚などと…！

雑魚ですよ！

我らドルーアにたてつこうなどとする連中はね！

何故あなたがあんな連中を先生などと呼ぶのか

何故あなたまでもが！

ぼくをそう買い被るのか

ぼくにはなんの力もない何もできない

どこへも行けない何もできない!!

百年前

そう思われていた青年は神剣を手に入れた

そしてその血を継ぐ者もまた

碧海の中で
牙をむいた
同じように
何もできず
どこへも
行けまいと
思われていたのに

アリティアの
王太子
マルス
――

マリク
あなたは
かの国の生まれ

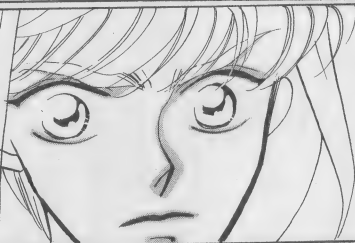
だから
恐れていると？
同じように
牙をむくと

小さく
弱い牙をね

マリク 私は
あなたの才能を
信じて
いるのですよ？
このまま
埋もれさせるには
惜しすぎます

同じ魔道士なればこそ判ることもあるのです

あなたの魔力もアリティアの王子マルスもあたら失くすこともないでしょう

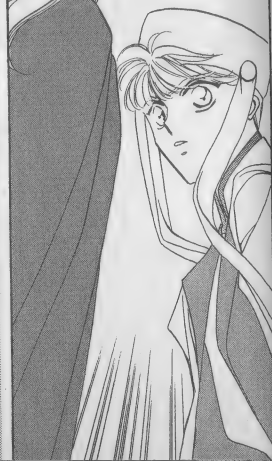
……!?

一行はオレルアンに入りましたよ

オレルアン王弟草原の狼ハーディン公が先頭きって我が軍と戦っていますが

我が軍の騎馬隊とね

強いですよ騎馬隊

旧マケドニア旧グルニア両国の選すぐりですから

公は苦戦なさっているそうです

ハーディン公は知りません

手遅れです
放っておくしかない

人を咬むことを
知った成犬は
もう人に慣れない

けれど
大きく強く
育つことが
判っている仔犬は

人をたくさん
咬み殺すために

手元で
育てることが
可能です

大事に
大事に　ね

――

マルスさまは

仔犬などでは
ない

もちろん！

御自分の牙が
小さくて弱いと
お判りになれば
よいのですよ

ドルーアに
たてつこうなどと
――

メディウスさまと
ガーネフ大司祭は
お心の広い方ですよ

帝国の基盤と
なった
マケドニア竜王国と
グルニア王国の
王族を生かして
おいでなのです
からね

きっと
仇敵アリティアの
王子といえども
例外ではありません

我々の
究極の目的は
アカネイア大陸の
統一なのですから

魔道士
マリク

王子と
幼なじみ
だという貴方が
我々の仲間と
なるならば

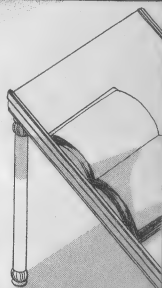
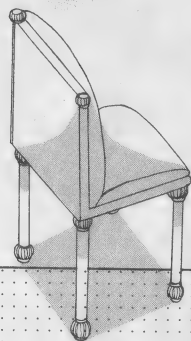
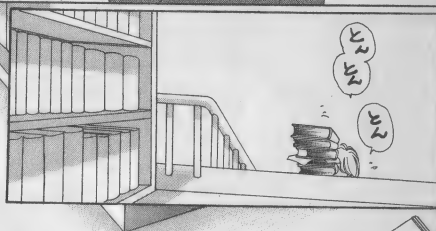
マルス王子も
素直にお話を
聞いてくださると
思うのです

人が来ますね

この国
カダインは
中立というより
無所属

それでも
ドルーアの者と
会っていたとなれば
いろいろ不都合も
あるでしょう

――では　また

とんとんとん

マリク
気分でも？

いえ
平気です
ごめんなさい

…マリク

マリク

懐かしい声

優しい香り

永遠の時間――

駄目です

呼ばないでください

ぼくを

ぼくは
逃げたのです
から

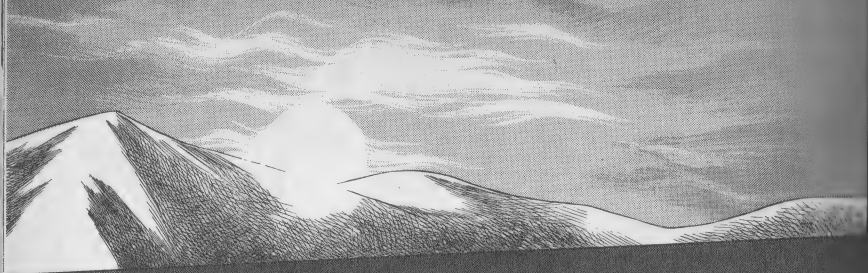
エリスさま

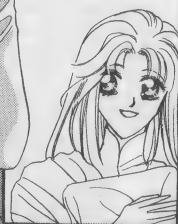
あなた方から

マルスさま
―

見つけたぞ
アリティアの残党だ
──っ!!

深追いするな
この地では敵に一日の長がある

はっ

今日も野宿ですが不自由はございませんかシーダさま

平気！泉が近いの

はるか地平線も見晴らせるこの辺りでは天馬のエルカイトも思うように飛べないもの良い水でも飲ませて機嫌をとっておかないと

広い国ですねオレルアンは

ふんふんふんっ

もうこの草原の中を幾日も進んでいるのに砦ひとつも見えないなんて

敵は出てくるんだけどな

ドルーアっってもたいしたことねぇ連中だよなぁ

あっアリティアがつよいだけで、なんだそっかー

たいしたことないのはおまえだ

なんだと――ッ？

ギョッ

ナ ナバール

ふん！

どきどきどき！

不用意な脅迫をしてやるなよ

気づかなければ死ぬ

あれがドルーアだと？

下っ端の下っ端ドルーアの名を持たなければただの野盗と変わらん連中にすぎん

併合された旧マケドニアの竜騎士団旧グルニアの騎馬隊

ドルーアの本当の「強さ」はまだ欠片も我々の前には現れていない

あんな連中を
倒したところで
なんになる

なっに
言ってんだ
なにごとも
経験だろうが
てめえひとりで
ぜーんぶ
やっつけた
つもりかよっ
ナバール！

ジュリアン

その気になれば
造作もない
おれならば

本当だから
何も
言えない
だから止めたのに
ちっ

あんな連中
あんな連中に
――

キリ

確かに
大事の前の
小事かも
しれないね

現れていない

オレルアン緑条城どころかニーナ王女のおわすというオキステス城の影すら見えないのだもの
がさ・
マルスさま
王子
また御勉学のお時間から逃げだしてこられましたねっ
この状況で読書もないと思うんだけどね あのじいときたら
あせっても仕方ない 一歩一歩進んでいくしかぼくたちには方法がない
確実に確実に
王子っそこになられますかっ
がさがさ
今日は見つかるのが早いや
!

こられましたねっ

あのじいときたら

早いや

オグマ
ナバール
アベル
カイン

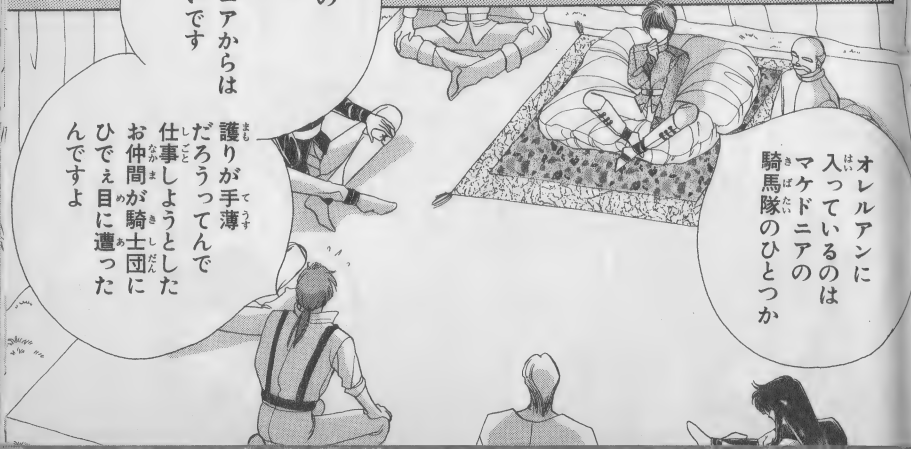
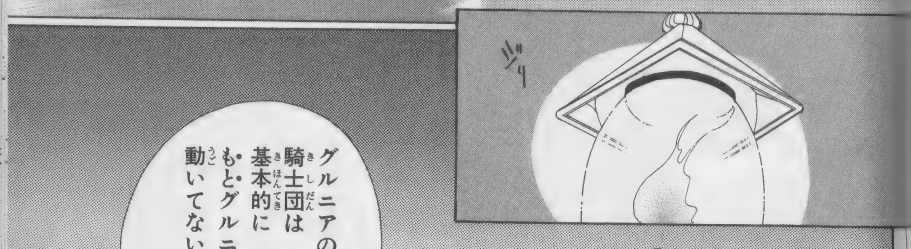
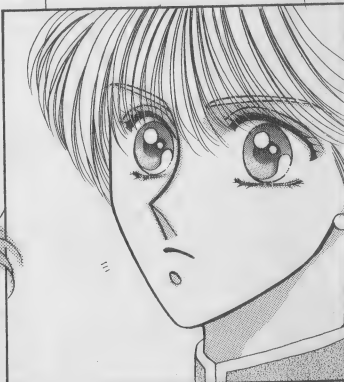
それに
ジュリアン
ぼくのテントに
来てくれないか

えっ!?

ジリ

オレルアンに入っているのはマケドニアの騎馬隊のひとつか

グルニアの騎士団は基本的にもとグルニアからは動いてないです

護りが手薄だろうってんで仕事しようとしたお仲間が騎士団にひでぇ目に遭ったんですよ

マケドニアの跡継ぎ王子もなかなかのやり手だってハナシでしたからねぇ
ドルーアの中で出世ねらっていろいろハデなことやってんじゃないですか？
ミシェイルどのか
――国王だ
第十一代マケドニア国王サラガニスは国がドルーアに統合される前後に病に倒れたと聞く
この戦乱の時代にそんな国王は邪魔なだけ
かわって第一王子ミシェイルが国を率いている
王子自身優れた竜騎士だというからな
だから国民からの反対もたいしてなく
詳しいんだね
いやー盗賊としての性ですサガ！
知ってて当たり前であって

あそこの騎士団は
弱いとか
遠征中だとか
「仕事しやすい」
状況をいつも
捜してるだけ
ですよ
王子さま

……

なんの関係も
ありませーんって
カオしてたくせに
ナバールって
サムシアンとこで
きっちり
情報もらってん
だもんなぁ

シスターだ

レナが
なんだよっ?

ばっ

マケドニアの
出身らしいぞ
こと王族に
関しては
なにやら
詳しい様子だが

マケドニアは
飛竜の産地
故に竜騎士
発祥の地でもあり
竜騎士団の強さは
並大抵ではないとか
しかし騎馬隊も
グルニアの
黒騎士団ほど
ではないにしろ
かなりのものと
聞き及びますぞ

ぴく

ハーディン公と
合流できれば…

会ったことが
ある?
ジェイガン

直にお目にかかったのは二度三度でございますが
王弟でありながら馬の扱い 剣さばきなどたしなみをはるかに超えておいでした
ドルーアに囚われの身であったニーナ王女を奪回したと聞いて あの方ならばと納得したものです
逆にそのことがドルーアを本気にさせたとも言えますが
その公もオキステス城から一歩も動けぬ様子
近いうちに会えるよ
ハーディン公は動かない ぼくたちは毎日毎日動いている
どこにいるかも知ってるし追いかけるより簡単

捜すこともない

ぼくたちがそこに行けばいいんだ

戦いも森と同じ遠回りするよりつっきっていった方が早い

そう 確実に——

まだ起きてんのかよレナ

まぁジュリアン駄目よ

あのテントにはシーダさまがお寝みなのよそれ以上近づくのは許しません!

めっ

………

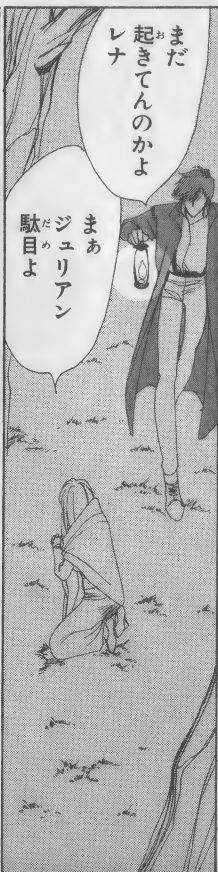
はぁ

おいのり?

ええ 私はシスターだもの

——

ななにを
おいのりしてんの
かなぁ なんて

あはははっ

…ふつう
教えねぇよなぁ
ごめん邪魔して

平和よ

早く
戦争が
終わります
ようにと

うん
早く

終わると
いいよな

でも
永遠なんか

ない

ずつと
このまま
そのままなんて
あるわけない

時間の流れを
変えられるほど
人間は
大きくない

流されて
戻れないから
前を見るしかない
んだ

あの星は
なんというの？

あそこの大きな白い星
あぁ あれはなんといいましたか
なぁ なんといったかなナバール
…おおかみぼし
呑気に星を見てる場合ですか オグマ おまえもつきあっててどうする
夜番がおまえなんで皆 お供を遠慮するんだな
だってあせってもうん きっといいことないしね
ないよね? ナバール
……
にこにこにこ

おっしゃる通りです 風が冷たくなってまいりました どうぞお戻りください

なんてカオしてるのオグマ

……

いや ナバールが少し気の毒かと

だって うれしくて 彼 怒ってたよね 今日の戦いの時

アリティアの残党って言われて

でも ナバールには言っちゃだめだよ また気に障るだろうから

やっぱり…

もう日が変わります モロドフ公が捜しに来られる前に戻りましょう

じいの話はね 面白いんだけど 昔ほどじゃないんだ

それは昔は
城の中で聞かれていたからでしょう
静かに平和に
うん
…いや
違うひとりじゃなかったから
エリス姉さまと
マリクがいたから
大臣の甥でね同い年だったからすごくいっしょにいたんだよ
三人でよく遊んだんだ
マリクは読書家でよく本を読んでた
――アリティア脱出の際に…？

死んでない！
死んでないよ
マリクは
ひどいなオグマ
十歳の時にね

カダインに
行きます

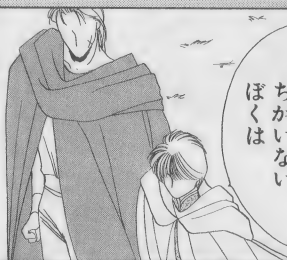
ぼくの知りたいこと
ぼくの欲しいものが
そこにあるから

だから

お別れです
マルスさま

…ほんとは
マリクの方が
み・つ・き年上で

さぞかし
手のかかる
弟だったに
ちがいない
ぼくは

だって
行ってらっしゃいも
がんばっても
ちゃんと言えたか
どうか自信がない

ほんとは
ほんとうに

好き

大好き
だったから

いつまでも
いっしょに
いられるって
思うほど

あれは
そんなに
遠い昔の
ことだったろうか

懐かしい声
優しい香り
永遠を
知ってた

でも今は――

今のあなたは
おひとりでは
ありません
けれど皆
知っております

あなたの孤独を

ですから皆
あなたのお側に
おります
私たちは
誰ひとりも
間違いなく
そのための力です

お忘れなきよう
私たちの王子

ありがとう

だけど皆
知ってる

あなたの往く道が
どれだけ遠いのか

あなたの孤独が
どれだけ遠いのか

ほら これ
マリク
姉さまの
首飾りの
これ

アンリさまが
アカネイア王妃から
いただいたもの
なんだよ

ぼくは
神剣を
継ぐんだ

世界を救い
アリティアを建て

平和と勇気の
象徴

いつか
王となる日に

王と
——

アリティアが
陥ちた

グラが裏切り
王が殺され
王妃と姉姫は
ドルーアに
囚われた

王子

マルス王子は

タリスへ
逃げのびた

アリティアが
陥ちた
ドルーアが大陸を
手に入れる

マルスさまは

聖アカネイアの
ニーナ王女が
御無事だ
だが

ドルーアが

マルスさま
マルスさま

亡国
アリティアの
マルス王子が

タリスを
発ちましたよ

ガルダの海賊を
叩きのめして

サムシアンという
盗賊団も

始末し

て

マルスさま

あなたの
あなたの道(みち)は
もうこんなにも
激(はげ)しく遠(とお)い

ゴ

オオ

エイナス

夢でぼくを
動かせると
思うのか

夢ごときで!

知っていた

思って
いませんよ
しかし この私の術を
夢ごときとは

かのひとの
明日の重さを
だから逃げた

ただ見ている
だけしかできない
その重さを
感じることも
できない

今のぼくに
なんの意味がある

さすがですね
マリク

我が師
ガーネフの
見込み通りだ

ガーネフ？

あなたのことを陽の光を受ける自ら光を発することのない月だとも

だが　あの月の光源なる太陽は際限なく大きく明るく熱い

陽はすでに火傷するまでに熱いが月にはまだ手に入れる余地がある

我が師も魔道の究極を目指されるお方だから志を同じくする者に甘い

剣で打てない敵を打つために魔法はあるというのに！

近づけば火傷するというなら

魔法で砕けばいいと思いませんか

陽も月も星も

そのための力なのだから！

させないッ

そう言うと
思っていました
ならば

あなたは
敵だ

あの場所が
ぼくの永遠
ぼくの総て

そんなこと
知ってる

背を向けてでも
手に入れたい
ものがあった

だから今の自分は
いないも同じ

背を向けたまま
あなたに
憧れている

ああ もう
砂ぼこりの
ひどい

おう

はあっ

なんと強力な冷場の呪文

ビキビキ

しかし効かぬ

うあっ

よくぞ防いだ!

どんっ

！

く……

はね返した
私の魔法を

なんだ
どうした

誰か魔法の
実験に失敗
したのか!?

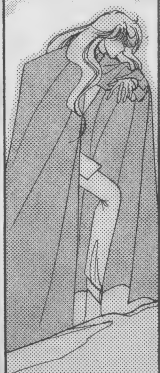
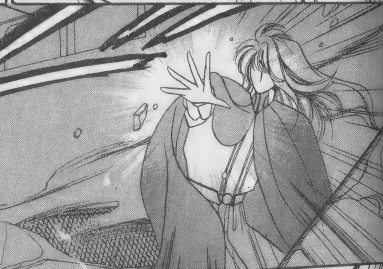
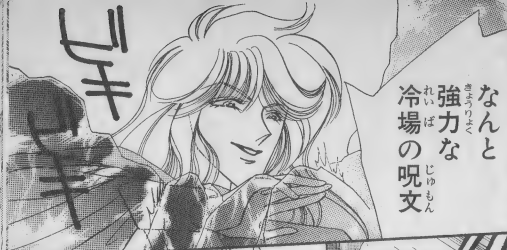
なるほど
たいした子供

！

子供だと

手加減しておればぁ!!

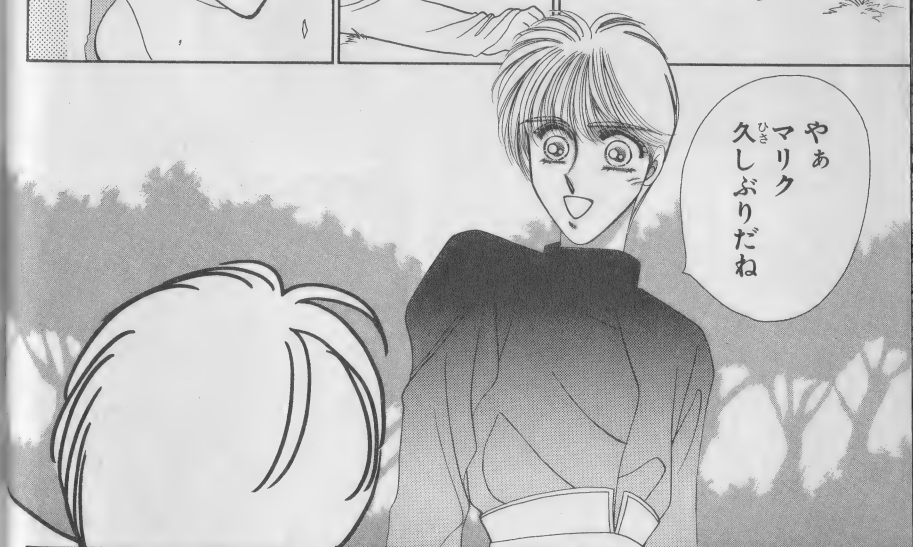
なにが

足りないいんだろう

ずつといつしょに
いたかつた
許されるなら
いつでも
言つていたかつた

好きです
大好きです

う…

読める本は総て読んだ
受けられる教えも総て受けたのに

やぁ
マリク
久しぶりだね

マルスさ…ま

驚いた？
大きくなったろう
マリクはあいかわらず細いね

説得に
来たんだよ
おまえが
ドルーアに
たてついていると
聞いて

世界は
ドルーアを
ガーネフさまと
メディウスさまを
ひどく誤解
しているんだ

ぼくもようやく
判った

だから今は
ぼくは
ドルーアの一員
なんだ

マリクには
見せてあげる

ぴっ

その証だよ

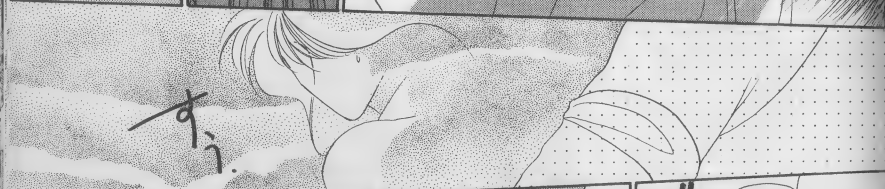
メディウスさまが
つけてくださった
んだ

エリス姉さまも
無事だったんだよ
ほら 証をつけて

マリク

行きましょう
わたしたちと
永遠の楽園
ドルーアへ
そう
その手を
お取りなさい
マリク
楽園が
あなたを
待っていますよ
一度眠りこければ
二度と目覚めぬ
永遠の褥が
同じ夢ならば
私がしかけた夢に
かかって人形と
なっていた方が
よかったのに
…します
感謝します
感謝…します
感謝します
――

ぱ!!!
なっ…
すぅ…
感謝します
美しく
成長なされた
おふたりを
見せてくれて
ゴオオオ!
マリク

ばしゅっ

幻術を破った？

心の奥底
一番深いところに
いる人物で
造りだしたのに

だが奴はまだ
幻術の中にいる

今ならば
通常の魔法で
倒せる！

!!

風!?

風が幻術をふき・と・ば・す・だと?

アカネイア前史
人間の歴史のその前
竜人族の遺産

貴様

禁呪を!?

そして敵を砕くもの

魔法とは日々を満たすもの

貴様どうやって禁呪を手に入れたのだ

判らない

ただ本当に
これが欲しかった

欲しくて
欲しくて
この六年間

永遠の場所
ぼくの総て

背いてでも
手に入れる

永遠の場所
ぼくの総てのために

——幻術など
きくものか

ぼくの知ってる
エリスさまと
マルスさま以外の

エリスさまと
マルスさまなんか
知らない

でも
幻だけど

エリスさまと
マルスさまに
傷をつけたね

マリク

来たれ
宇宙の激流
彼の友よ

マルスさまの
敵が
ぼくの名を
呼ぶのか

聖剣烈風
切り裂け
風の竜

ぱッ

これが竜王が封じた禁じられた魔法

禁呪が本当にあつたなんて

それを使える人間が

アリティア側にいる

ガーネフさ——

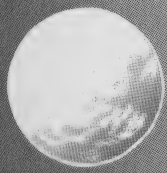
く

ひゅるん

ひゅっ

まだおさまりが悪いなぁ

でも

手に入れた
ぼくだけの剣

あのひと
だけの剣

ぼくを呼んでください
あなたの声で

ぼくの名前を
いつでもどこでも

それが呪文
あなただけの
禁呪

ぼくが
あなたの剣に
なるための
呪文

今晩動ければ
丘ひとつ向こうの
村に辿り着ける
のに

こう
月が明るいと
うかつに
移動でき
ませんね
けっこう
大きな村
だったって?
シーダ
はい
見渡す限りの
草原の中で
さすがオレルアンは
豊かな国ですね
すぐに出立
できるように
しておけよ
明日
朝霧でも
出れば
夜明け頃には
動けるのに
この草原で
森は絶好の
隠れ場所だが
逆に敵に
位置を教える
ことにもなる
森しか
隠れる場所が
ない

うわあっ
ぱッ
火矢だ
ヒュッ
ち
来るぞ
火？あれは
騎馬隊です 王子
オグマたちが応戦しております 一刻も早く村へお向かいくださいと
判った

オグマたちに必ず追ってこいと――!

火が

木に

火の明るさが目印だ
増援が来る

その前に移動を…

馬に乗れっ カイン

罠だ

こんなのにかまってる場合じゃない

こいつらは先陣だ
本隊は――！

姫さまッ

シーダ

大丈夫です
かすっただけ

でも――

ドルーア帝国
北西辺境騎馬隊
第二十三小隊隊長
ベンソンである

お覚悟めされよ
マルス殿下

お命を
頂こうとは
言わぬ
黙って捕えられよ

けっ

辺境の
二十三小隊
だぁ?
ホントに下っ端
じゃねぇか

ぐぁ

栄光の
アリティア軍が
んな雑魚に
やられて
たまるかよっ

あ

ジュリアン

ヒン

うおっ

転んでもタダでは起きないなっ

たりめーだ
盗賊根性なめんなよ…

わあぁ

ごめんね お馬ちゃん

シスターのところまでは連れて行けない

木の陰で少し我慢して待ってろ

!?

駄目です

馬と人と
両方射てなければ
効果はありません
王子

たった一本の矢
では

第二陣
第三陣行けえっ
第四陣以下は
待機

包囲を
崩すな

くっ

向こうは
「戦」をしている

海賊や
盗賊団とは
違う

訓練された
戦士たち

ドドド

手応えが
出てきた

ぼそ

王子
――ッ

身体を開けるな
カイン

ばっ

ぱっ

ギリッ

わあっ

うわっ

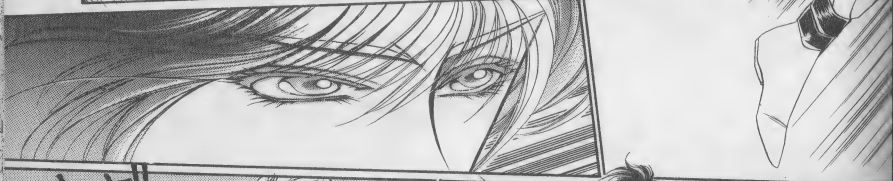
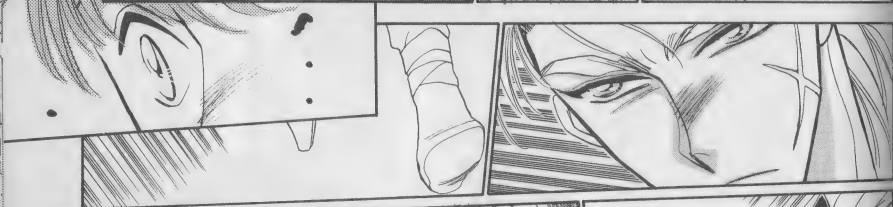
すとっ

ばっ

わー…

矢を抜いてやれ

馬上なのに
無茶を
言うなっ

…っく

ちくしょう…っ
騎士が使う言葉じゃないカイン
ちくしょう？ちくしょうと言ったのか
言わせてやるといい
言えるうちにな
後ろは炎
この場を切り抜けるのは簡単
この場だけなら

お退きください

皆
伏せて

ゴオウウウ

森(もり)が

なくなる

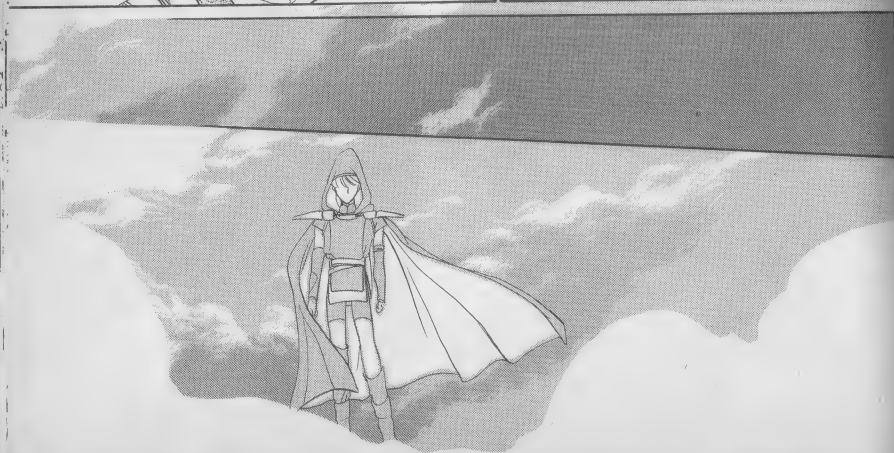
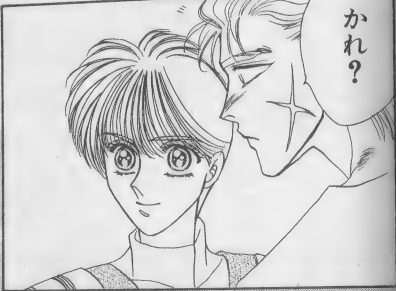
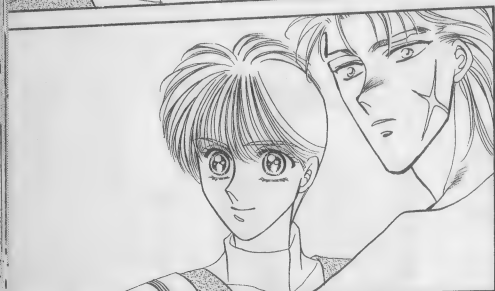
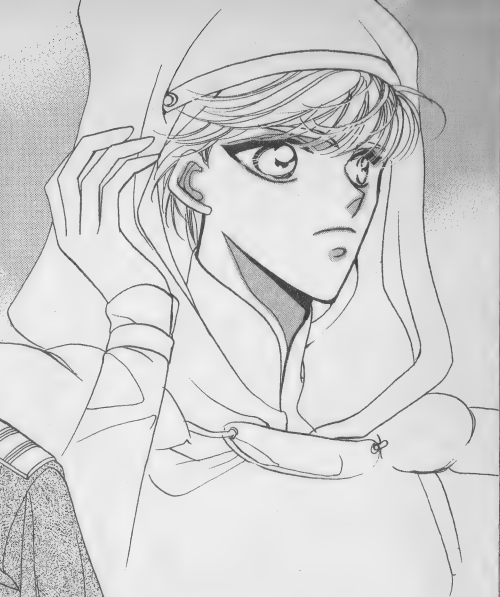
切り裂かれて
炎(ほのお)ごと

アアウウウ

敵(てき)ごと
——!

ドシュン

すっげえ

これが魔法かよ
すげぇ
すっげーー！
オグマ
カイン！
ナバールも
わーっ
カインの背中に
矢がーっ
おちつけ
アベル
おけがは
ございませんか
マルスさま
こんな
強力な魔法は
見たことがない…
けが？
あるわけないよ
ちゃんと
よけたから
彼の言った通り
かれ？

ただいま
戻りました
マルスさま
ぱさ
我が君
おかえり

おかえり
マリク
――

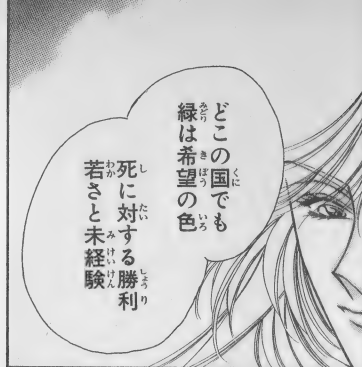
…遅れました
カダインから急ぎ
かけつけたの
ですが

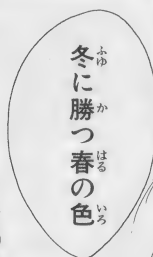
オレルアン城にも
オキステス城にも
ほど遠く
この丘向こうの
村を目指して
――

わたし
きっと彼と
仲良くなれるわ

きっと彼も
私と同じに
マルスさまの
ことが好きだと
思うもの

緑衣の魔道士か

では瞳も緑だな
自分の瞳と同色が魔道士の守護色

どこの国でも緑は希望の色
死に対する勝利
若さと未経験

あれは確かに
永遠の時間
楽園の記憶
二度と
戻りはしない

二度と戻らないなら
また始めればいい

冬に勝つ春の色

そのために別れて
帰ってきた

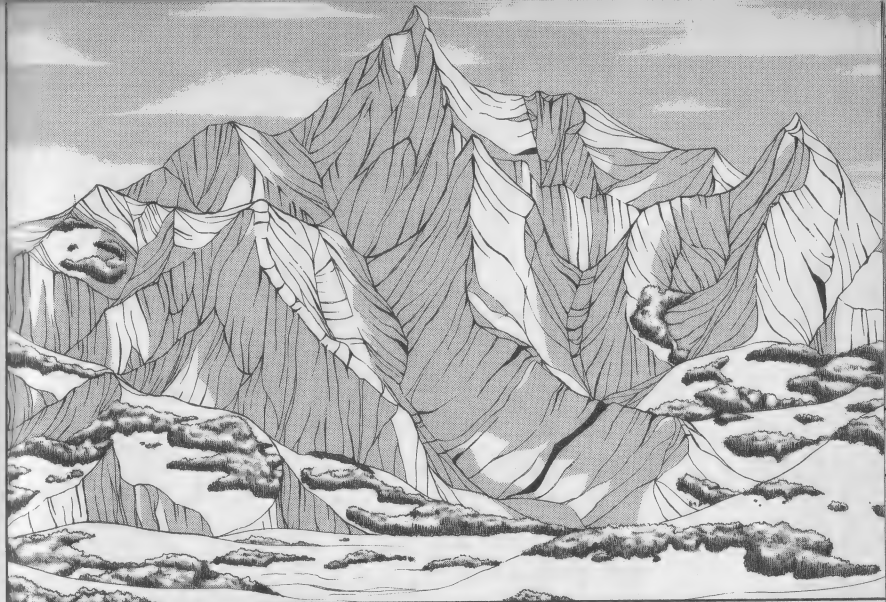
永遠の場所
ぼくの総ては
もう二度と
失くしはしない

★第3話／風刃★おわり

ファイアーエムブレム™

第４話

狼拠

ろうきょ

あの山の向こうが
オレルアン緑条城
——

アカネイア
聖王国に次ぐ
古い歴史を
持つ王族
オレルアン

未だドルーアと
戦い続ける
最後の王国

ブレナスク王に
おかれては
自ら指揮を
取られ
兵を率いて
おいでになるとか

この近辺では
いちばん大きな
この村でございますが

腕に覚えのある者を集め
緑条城へと
斥候を出そうにも
城を攻めているのは
かの竜騎兵団
なのでございます

竜騎士

あのマケドニアの
——！

とうてい
歯が立ちませぬ
我らが王の力にも
なれず

マルスさま
あなたさまの
お役に立てるべき
情報すらも
ろくに
ございませぬ
申し訳
ございませんっ

何を
言うのだ
村長

キィ

この戦時下において
我らアリティアを
逗留させて
くれるだけでも
感謝の念にたえないのに

緑条城のことも
もちろん心配だが

なおも険しい
山の向こうに
あるという

オキステテス城

そこにおられる
オレルアン王弟
草原の狼
ハーディン公

そして

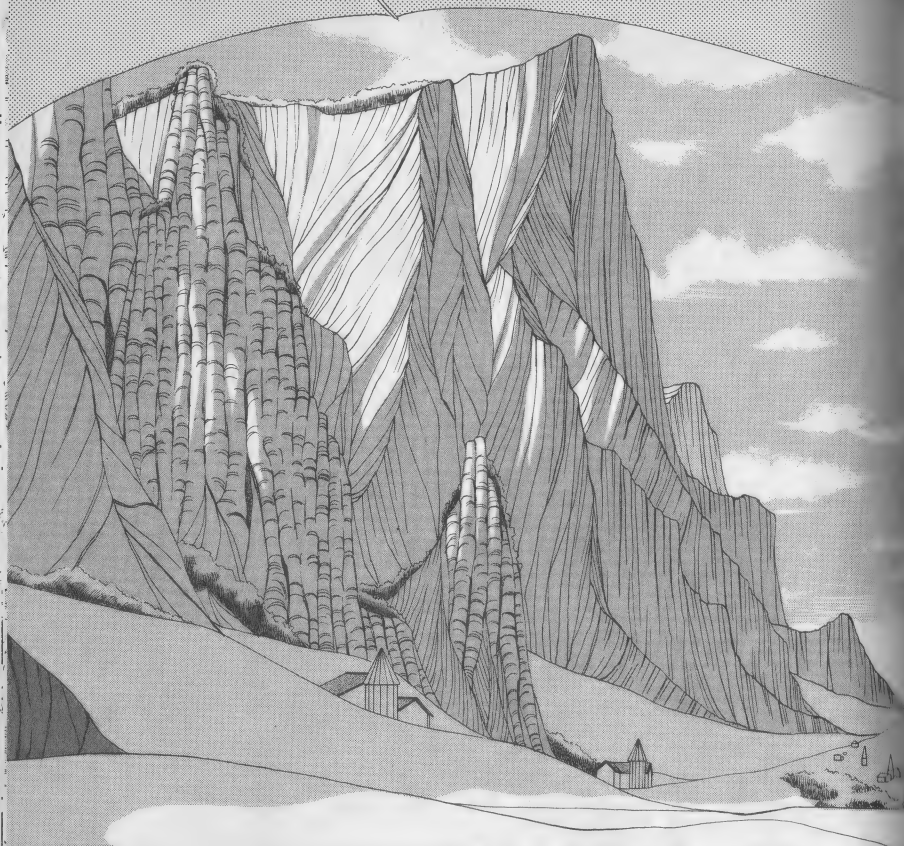
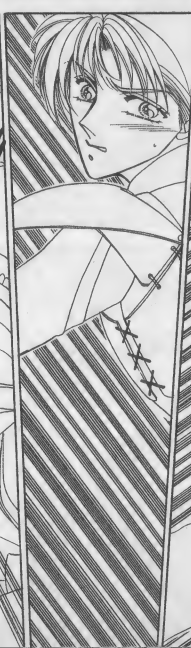
アカネイア聖王国
最後のひとり
プリンセス・ニーナ

ハーディン殿下が
あのにっくき
ドルーアから
ニーナ姫を
お助けしてから
はや半年にも
なります

グラ

ニーナ姫が
ドルーア城から
グラ城へと
移される道中で
殿下が奇襲を
かけられて

裏切りの

もうその時は
アカネイアの城は
占領されてたしさ
緑条城の方が
近かったわけだ
けど 馬の扱いに
かけちゃあ
グルニアか
オレルアンかって
言われてても
竜の速さには
かなわなかったのな
なんとか
オキステス城まで
辿り着けたけど
周りは敵だらけ
進むも退くも
できねえらしい
そのまま 姫だけを
お護りしている
草原の狼
英雄譚
だよな
まずは
ハーディン公と
合流して
ニーナさまを
お助けせねば

ドドド

はっ
はっ
はっ
はっ

はっ

ドドドドドド

ド

往生際が
悪いぞ
オレルアンの騎士

！

弓兵

ウルフ竜が

行くぞ ロシェ ぐずぐずするなッ

飛べない竜は 近づかねば 恐れることはない

騎士さえ倒せば それでよいのだ

ドルーアに 魂を売った マケドニアの 騎士たちさえ

倒せば

竜騎士!!

恐れるな

あッ

竜と戦うのではない

剣を交えるのは我々と同じ人間だ

ならば

だんっ

我々オレルアンの騎士に敵はない

!
ザ

……！

殿下

お帰りなさいませ！
偵察中に また敵と出くわしたとか

うむ
しかし大事ない

こうも度々
あんな近くにまで
出張ってくるとはな
ドルーア側も
いよいよ…

ハーディン

無事に戻りましたか

ニーナさま

たたた

これは なんと もったいない

私ごときを お出迎え くださいますか

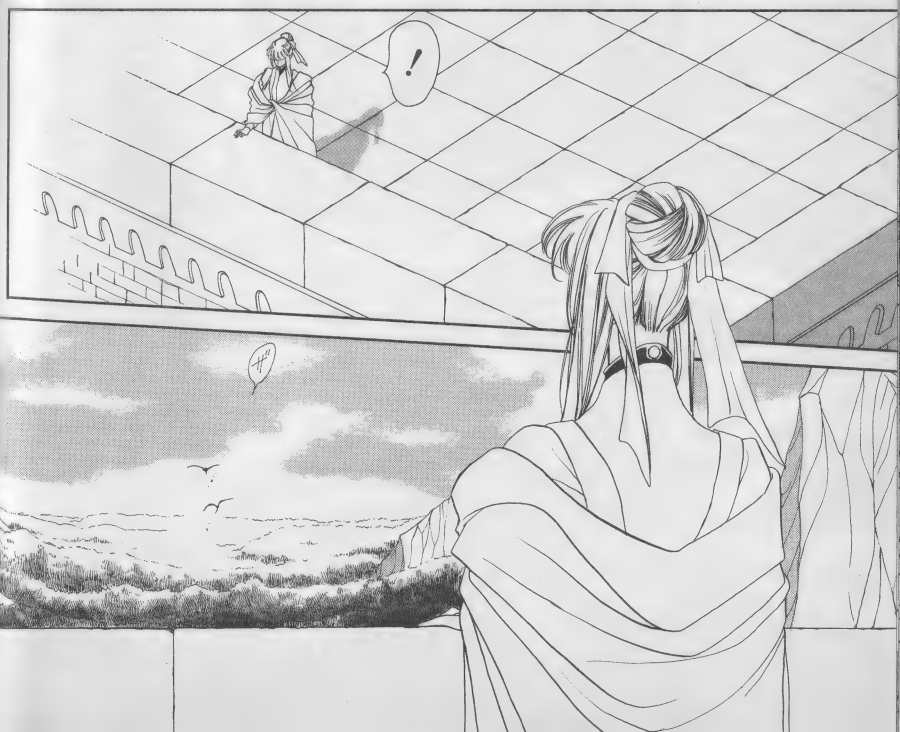
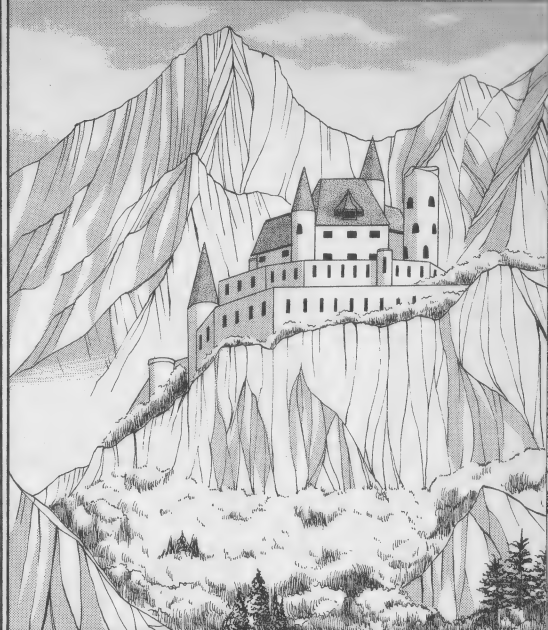
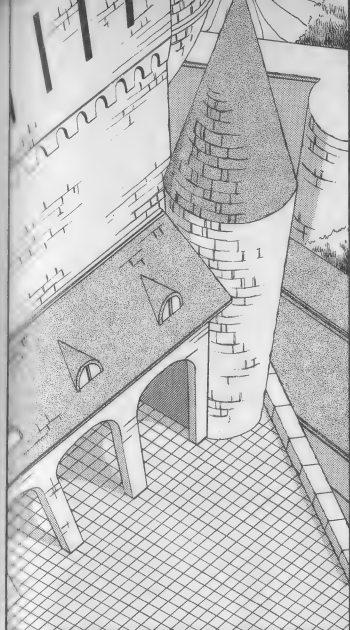
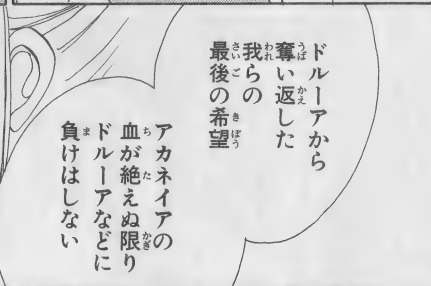
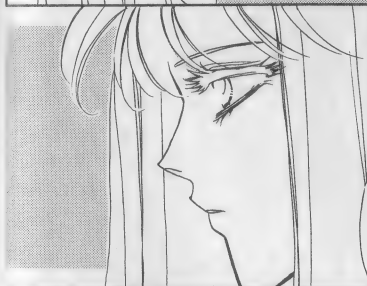
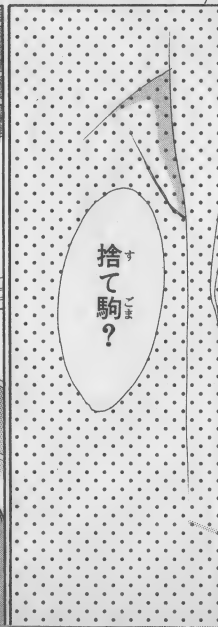
す.

ニーナ姫

なにを
そのような
——
ハーディン

する

失礼を
手をまだ
洗いもして
おりませぬ故

あいかわらず
お美しいなぁ
ニーナさま
——

あまり見るんじゃない姫さまが汚れるだろうがっ
その前に目がつぶれるってウルフ
世が世ならばおれたちは同じ高さにいることすら許されぬのだからなぁ
ドルーアから奪い返した我らの最後の希望
アカネイアの血が絶えぬ限りドルーアなどに負けはしない
我らの——
捨て駒？
我々にどれだけの力が残っているのかを確かめたのでしょう
戻らなくて当然の連中でございました
そんな…

マケドニアは
兵を
使い捨てるの
ですか

マケドニアでは
ございません
ドルーアです

とは言っても
あのような連中を
いくら倒しても
ドルーアは揺れも
しないでしょう

状況は
なにも変わりま
せん

オレルアン緑条城は
マケドニア軍に
攻めたてられ
我々への応援も
出せぬまま

我々もまた
このオキステス城から
一歩も動けませぬ

ドルーアは
間違いなく
一歩一歩
我々を追いつめて
いるはず

されど
ニーナ姫さま
だけは
我が命を賭けて
お護り致します

そして必ず
ドルーアを粉砕し
聖アカネイアを
取り戻し
聖アカネイアの
王城
アカネイア・パレスにて
安らかなお眠りを
お約束致します

いつでも
わたくしを
救ってくださるのは
貴公なのですね

偉大なる
オレルアン王
ブレナスクの弟
草原の狼
ハーディン

そう
あの時も

ドルーアに
囚われの身となり

見せしめのために
生き永らえていた
あの日々

絶望と涙しか
なかった　あの日々から

わたくしを
救い出して
くれたのは

死にたいのか

絶望と涙で喉をつまらせて

――貴公でしたね　ハーディン

剣は嫌いです　怖い　思い出したくないことばかり

けれど　あの時　わたくしを助けにきてくれた貴公の剣は

少しも怖くはなかった

そこを退け下郎ども

その汚い手で

――死にたいのか

ニーナさまに
触るな
よくぞ
御無事で
私
…私は
ハーディンと
申します
あなたさまの
御無事を
信じて
おりました
――――!
あなたは
死ねない
死んでは
いけない

だから
息をするのだ
口を開けて
胸を反らして
絶望と涙を
そのままに

前を向くのだ

…はあっ

信じております
ハーディン

今の
わたくしには
貴公だけ
――

もったいない
お言葉で
ございます
ニーナさま

ああ それにしても
マケドニアの
竜騎士の
うとましいこと
天空騎士さえも
近寄っては
こなくなり
ましたね
ニーナさま
それは…
心配しないで
ハーディン
もう二度と
兵を募ったりは
しません
今のわたくしの
状態では
十分な鎧も
与えては
やれませんもの
また
前のように
赤毛の竜騎士に
壊滅させられて
おしまい
もと・マケドニア王国
第一王女
竜騎士の
ミネルバ姫
なんと
マケドニアの
竜騎士の
うとましいこと
——!

王族でありながら女だてらに竜を手足のように乗りこなす

ドルーアの一員となった今でも味方にさえ恐れられる戦いの女神

エリーヌ・ビューナ

いえミネルバのことだけを責めてもせんなきことです

彼女もまた国のため民のため戦っているのでしょうから——

ミネルバ姫率いるマケドニア第二の主力部隊白騎士団はレフカンディを攻めているとか

オレルアンと聖アカネイアの国境の

まず国獲りなのですね

わたくしのアカネイア・パレスは占領されたまま

わたくしはどこにも行けませんね

ニーナさま——

彼は
どうして
いるのでしょうか
黒騎士
カミュ卿のことで
ございますか
カミュ
名高き
グルニア王国の
若き名将
カミュ将軍
黒騎士団の
総帥として
グルニアを
聖アカネイアを
護り
そして
裏切った
聖アカネイアを

殺せ
滅ぼせ
この大陸は
儂のものだ
歯向かうものは
許さん
ドルーア帝国の
一部となった
祖国グルニアと
共に
彼は騎士
なのです
心の総て
存じております
絶えるべき
アカネイアの血を
かろうじて
残せしめたのも
卿の御尽力
あってこそ
死にたいのか
絶望を
屈辱に
すりかえも
しないで
誇り高き
アカネイアの血を
継ぐ者が

涙の中で
息絶えるのか

前を向かれよ

絶望を
屈辱を
怒りに変えるまで

あなたは
死ぬわけには
いかないのだ
聖アカネイアの
王女よ
その名において

死なせはしない

それが
騎士としての
私が在ったことの
証

あなたが生きていることが
私の騎士としての
最後の誇り

その咎で
将軍は
中央政府より
追われ
まだ最前線で
戦っておられる

アカネイア王族は
今やニーナさま
ただひとり

なのに
カミュ将軍の
処分を見れば
そのニーナさまを
アカネイアの血を
ドルーアがどれだけ
恐れているかが
判ります

暗黒竜
メディウスは
百年前の
再現を
恐れている

聖アカネイアの許に
力が集う

滅んだに等しい
聖アカネイアを
救うべく現れた
勇者が奴を
封じたのですから

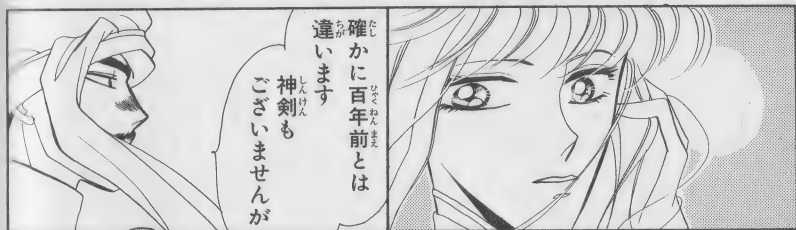
百年前とは
違います
ハーディン
その勇者
アンリの国
アリティアも
わたくしの国と
同じ

国は奪われ
王妃と王女王子が
生き残るだけ

王妃と王女は
伝説の神剣
ファルシオンと共に
ドルーアに囚われて
久しく

王子はまだ
幼かったはずです
百年前とは
違います

――
十六に
なられます

確かに百年前とは
違います
神剣も
ございませんが

かのマルス王子は
アンリのように
ひとりでは
ございません

!

ハーディン

それはどういう

マルス王子が兵を挙げました

第二の故郷タリスを発ちアリティア宮廷騎士団を核に軍備を整えつつ

オレルアンに入りました

過日捕えました竜騎士が教えてくれました

ここしばらく竜騎士の来襲が続いたのはそのせいなのだと

我々とアリティア軍を合流させまいと

百年前

アリティアの血が
聖アカネイアの血と
出会い
世界は救われたのだ

総ての力
総ての心
総ての願い
聖アカネイアのために

マルス王子とは
彼が八つの時に
会ったのが最後

あんなに
小さく可愛い
王子が…！

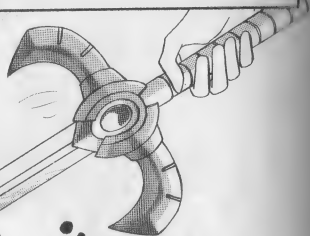
はい

伝説の勇者の国
大陸を救う
アリティア

ドルーアを倒し
祖国を奪還し
ニーナさまを
お助けすべく

この城に
向かっているはずです

たかだか
十六の少年が
率いる軍隊

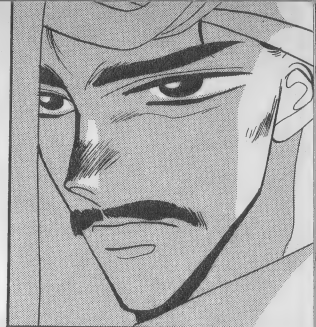
アリティアの勇者が
世界を救う

伝説を
背負えるのか

十六の少年が
ひとりで

ドルーアを
倒せると
いうのか

アリティアの名だけでは
何にも勝てぬ

誰も
護れぬ

だが──

アリティアがオレルアンに入ったと!?

真でございますか 殿下

兵を挙げたという話は本当だったのですか

先日捕虜にした竜騎士が命とひきかえに教えてくれた情報だ

あの伝説のアリティアが…

合流できれば緑条城へ帰還できるかもしれん

それまでなんとしてでも持ちこたえるのだ

はっ!!

アリティアの名だけで
これだけ士気が
あがる

ならば利用
させてもらおう

たとえ伝説に
そぐわぬとも
かまわぬ

総ては
アカネイアの
御為に
―

マルス
マルス―
姉姫は
エリスと言ったわ

碧い瞳の
美しい姉弟

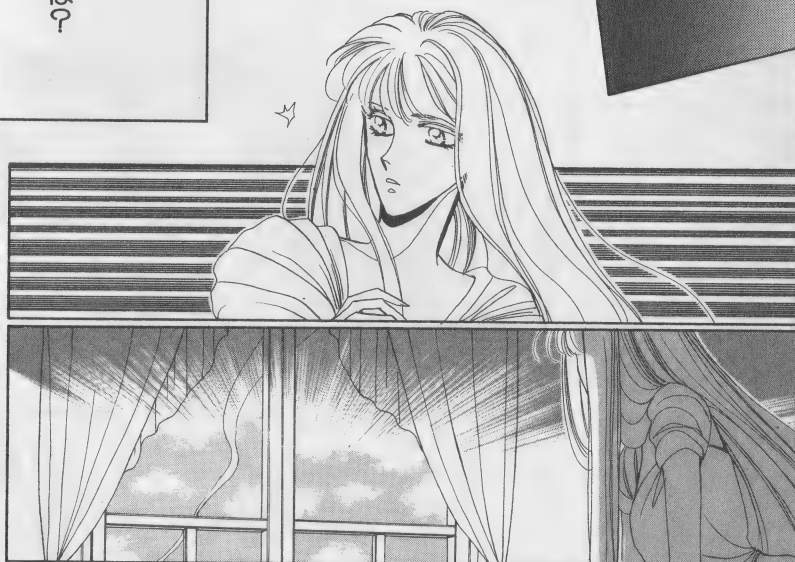
アリティアの王女が
同じ境遇にいる

ならば
会えないものかと
考えていた
彼女はまだ
ドルーアの手の内に
いるのだろうか

―

王女が?

アリティアの王族は
王妃と王女王子が
生き残っていると

ドルーアの人質
だった わたくし
同じ境遇の王女
王子はタリスへ
逃れ

では

王妃は?

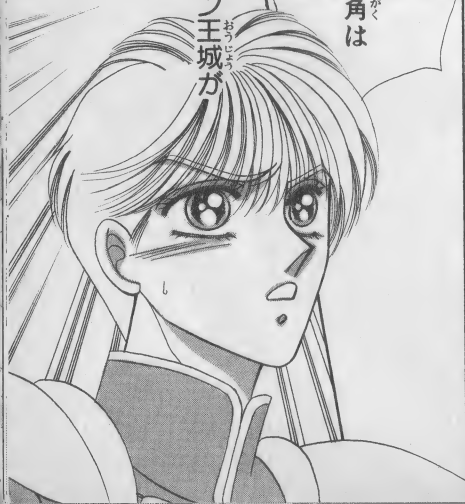
あの方角は

ばさ

城が燃えています

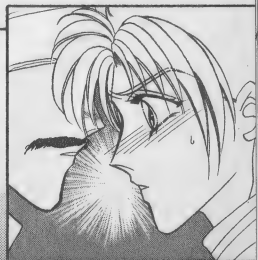
ニーナ王女のおわすオキステス城が!?

いいえ
あれは
あの方角は
緑条城

オレルアン王城が陥ちた

ドルーアめ
城が陥ちただけだ
国は滅んでいない
我々は負けておらぬ
緑条城を攻めていたマケドニア本隊が来るぞ
護りを固めろ

ハーディン
ニーナさま
御心配なさるな
命を賭けて あなたさまを お護り致します
たとえ 我らが 討たれようと
最後のひとりが 必ずアリティア軍へ あなたさまを お連れ致します
あなたさまは 大陸の最後の 希望
死なせる わけには まいりません
わたくしは

――わたくしは死にません
この身は
自分ひとりのものではないのだ
いずれ必ずアカネイア聖王国を復興しドルーアを倒すために
御武運をハーディン
オレルアンの騎士たちよ――！
ドルーアに牙をむく人たちの思いがこの身を生かしている
ドルーアに対する聖アカネイアの象徴としてわたくしが在るのだ
ならば死ねない
生きて生きて――

きゅ.

わたくし
ひとり

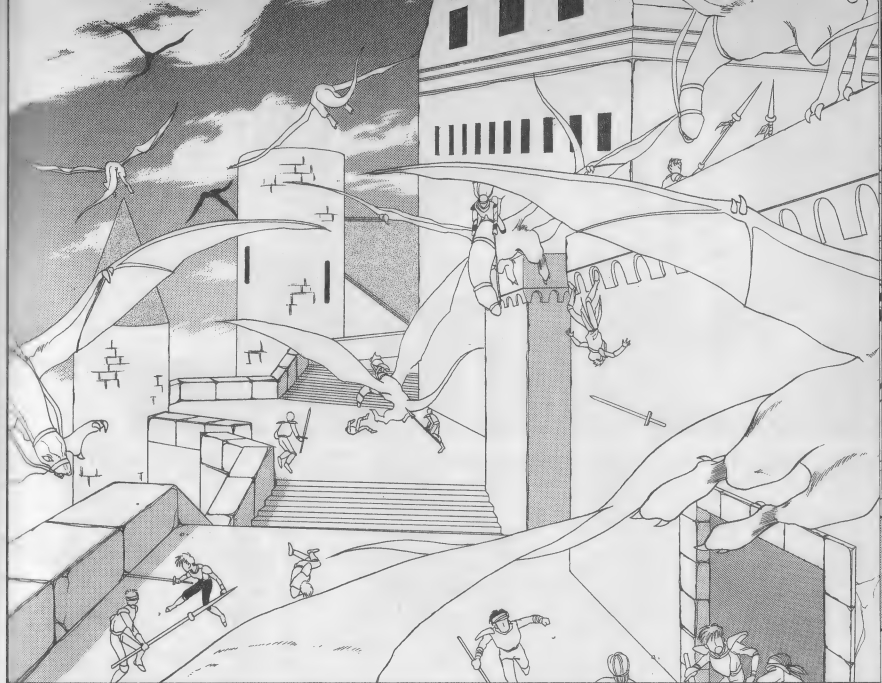
生き残って
なんになる

この世界で
この大陸で

竜騎士団だ——ッ

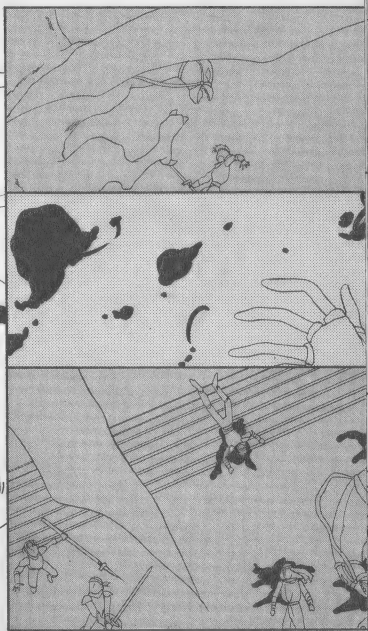
共に在ることが
総ての願い

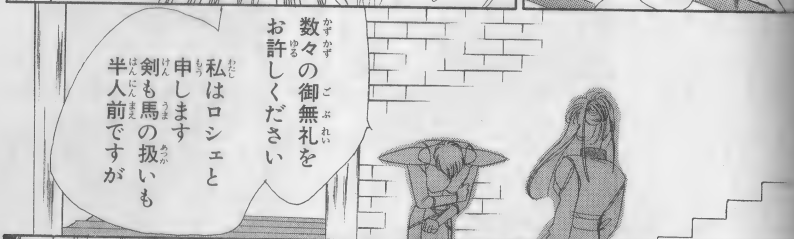
弓手兵
前へ

出るぞ

ニーナ王女を

お護りするのだ!!

こちらへ
王女

皆が
戦っているのに

わたくし
ひとりが
逃げるのですか

あなたさま
おひとりを
お逃がしするために
戦っているのです

数々の御無礼を
お許しください

私はロシェと
申します
剣も馬の扱いも
半人前ですが

あなたさまを
アリティアの
マルス王子のもとへ
お連れする大役を
仰せつかりました

ハーディンは

ハーディンは
いっしょでは
ないのですか

殿下は

殿下は戦っておられます

あれだ

あなたさまをお逃がしするために皆!

あの頭に布を巻いている男 あれが

草原の狼だ

王女ニーナも共にいるはずだ

ハーディンを討ちとれ

王女ニーナはその後にたやすく捕えられる

ばっ

あ

ニーナさま

王女!!

は.

ニーナさま

王女

まいりましょう
ニーナさま

わたくしは
アカネイア
聖王国の

唯一の

生き残り

アリティア軍の
居場所は
判っているの
ですか

行軍してくる
可能性の高い
道を逆に
辿ります

それでも
ここにいるよりは
生き残れる確率が
高いのですね

涙もない

はい
…はい!

ただ
深い深い

いたぞ
ニーナ姫だ

ドルーア

絶望で
息がつまるだけ

ごん.
は‼
御無事でございますか
ニーナ姫
…アリティア

ニーナさま!!

ジェイガン
敵は！

ほぼ壊滅
せしめまして
ございます

絶望の中で

伝説が
目覚める

★第4話／狼拠★おわり

ファイアーエムブレム™

第5話

連壁

れんぺき

百年の恋をしよう

オキステスはじきに陥ちるな

うむ オレルアンの完全降伏だ

待機している隊に増援を乞うのではなく勝利の報告をしに行くか

あの羽の動き…は
竜ではないぞ

天馬？

天空騎士
——！

!?

落雷？

しかし確かに今雷は森の中から

まさか

魔道の

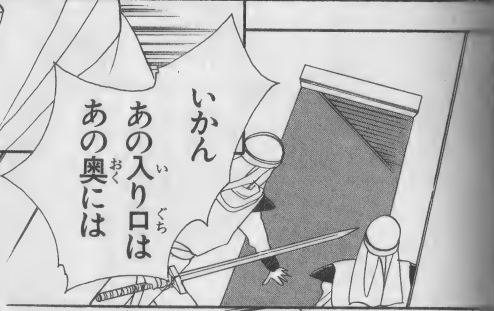
何ィ

あれは

はっ

加勢致しますハーディン殿下！

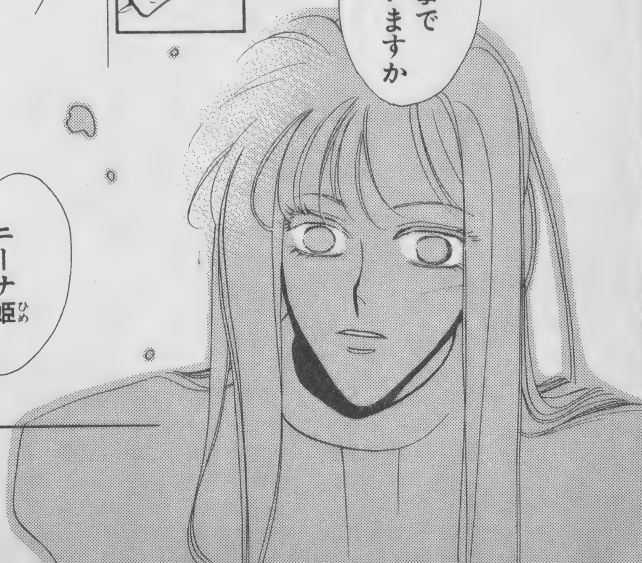
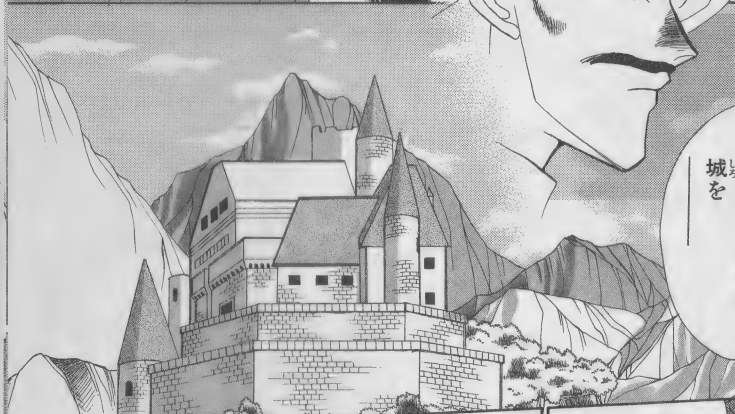
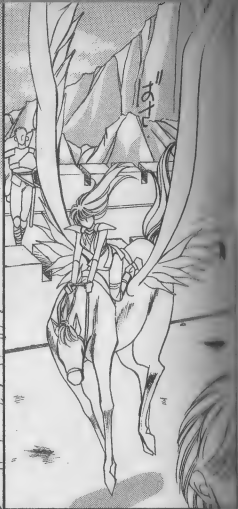
貴公らは

お初にお目もじつかまつる
ハーディン殿下
私はアリティアのマルス

正式なごあいさつはまた後ほど
御無礼を許されよ！

ぐ

あれもアリティアなのか
——?

いかん
あの入り口は
あの奥には

オグマ
ナバール!!

……背中から

ゴン

御無事でございますか

ニーナ姫

ばさっ

…アリティアの

この山中によくこれほどまでの頑強たる造りの城を

さすがオレルアン

態勢を整える間くらいは保つだろう

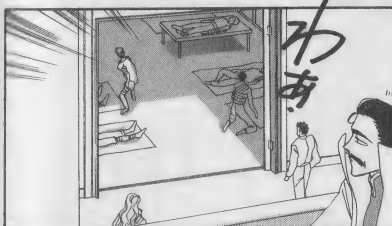
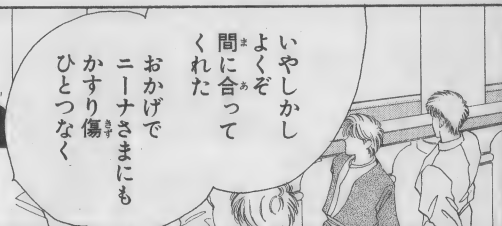
竜騎士を落とした魔道の雷の直撃には・・・やられるかもしれぬがな

味方に当てぬよう頼みますぞ魔道士どの

マリクは
かのカダインで
修行を積んだ身
術は正確かつ
強大だ
御安心を

ほう あの
魔道の国で
それは
たいしたものだ

ずいぶんと
かわいらしい
顔をして
おいでなのに

わあ

いやしかし
よくぞ
間に合って
くれた
おかげで
ニーナさまにも
かすり傷
ひとつなく

やめろよ
怪我人にッ

こやつらが
我々の仲間を
殺したのだ
癒しの術など
施してやる
必要などない！

てめえの血は
なまりいろかよ
騎士さま！

なんだと
貴様ァ

ジュリアン
あいつっ

待たれよ
アベルどの

少々頭に
血が上っているが
奴は名家出身の
騎士だ

無闇と
斬りつける
ような真似も
しまい

!

ハーディン公の
言う通りだ
皆
我らが止めに入れば
オレルアンの騎士に
要らぬ恥を
かかすことになろう

気遣いに
感謝する
マルスどの

貴様

おれの血の色は
こいつらと同じ
だからなぁ
放っとけ
ねえんだよッ

おやめなさいッ

タリスのシーダ姫!?
こ このようなところに…
姫さま
ほ・
気持ちは判りますがこらえてくださいオレルアンの騎士
・・彼らにはもう戦う気力も意思もありません
しかし…ッ
これがアリティアのやり方なのです

事無きを得たようだ

しかし無礼を働いてしまった

あの者には私が

あれもアリティアのやり方なのだろう？

ああ——

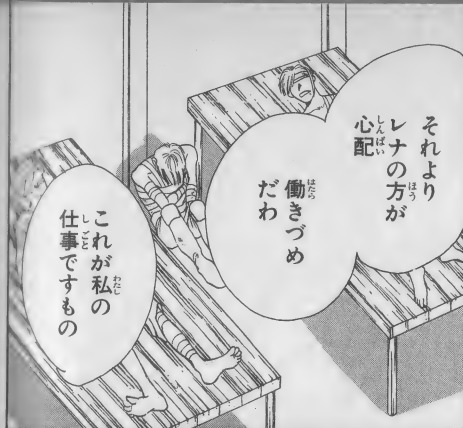
ならば気にすることもあるまい

仮にも一国の姫が下郎に混じって…なぁ

こそこそ

少しお休みになられませ姫さま

ふう

あらこれしきの仕事騎士の体力を甘く見てらっしゃるわねシスターさま

御手がこんなに荒れておいでだわ

もうずっと昔からよこんなの！

それよりレナの方が心配

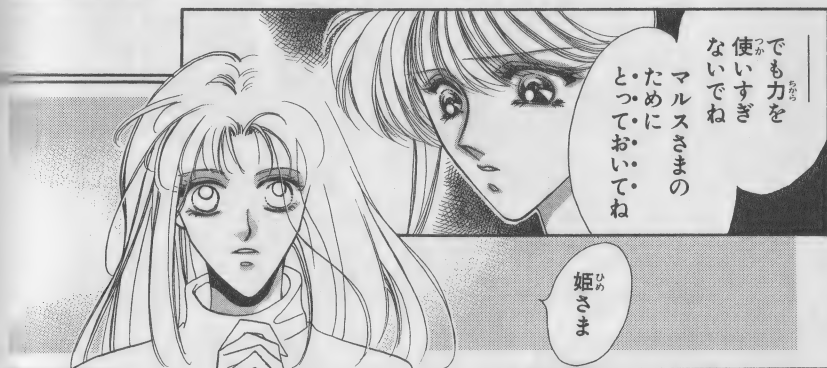
働きづめだわ

これが私の仕事ですもの

でも力を使いすぎないでね
マルスさまのためにとっておいてね

姫さま

レナのことを心配してない嫌な子と思ってるでしょうっ

いいえちゃあんと判っております

姫さまは私のことを気遣って手伝ってくれていらっしゃるこんな仕事を

マルスさまのことをとてもとても心配しておいでなのも判っております

嘘のつき方も
知らないような
シーダ姫さまを
嫌な子などと
思うわけが
ありませんよ

ありがとう
レナ

水を
汲んでくるわ

お気を
つけて

あら
お帰りなさい
ジュリアン

薬草
西の倉にまだ
あるって

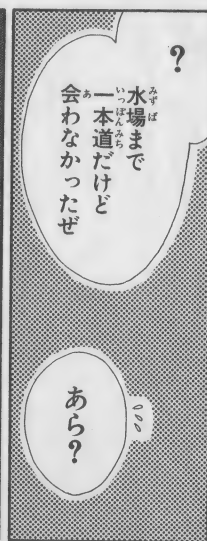
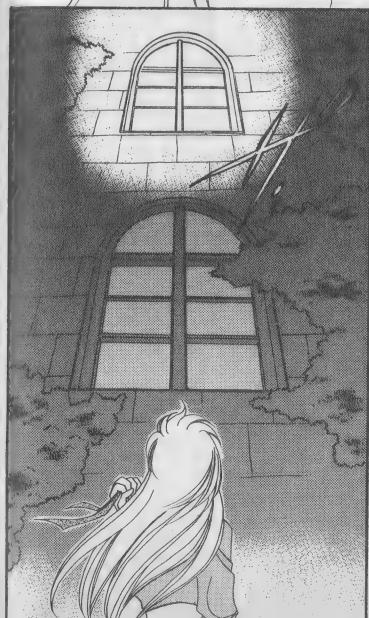
また
行ってくるよ

口のはし
血がにじん
でるわ!?

カインに
やられたんだ

本来なら
マルスさまが
主君として
おれの首
はねちまって
当然なんだけど

きっとマルスさまは
そうなさらない

だから代わりだ
おまえは騎士じゃないだけど
アリティアの仲間だ
マルスさまのアリティアの
けっこう効いたねぇ
何故そんなに怒ったの
おまえが
不眠不休でしていることを必要ないって言ったから
?
――ムシの居所が悪かったんだよ
薬草のついでに水汲んでくら
さっきシーダさまが
は～～～、
?
水場まで一本道だけど会わなかったぜ
あら?

まだハーディンさまや
ニーナさまと
お話しておいで
なのね
マルスさま

嫌な子などと
思うわけが

百年前
その当時の
アカネイア王女
アルテミス姫を
救ったアンリ

大陸を救い
聖アカネイアを
救った勇者も
未だ国王では
なく

故に
実らなかった
運命の恋

アカネイアとアリティアの恋

…私って
やっぱり
嫌な子だわ

伝説も運命も
あの人を
連れていかないで

誰にも言えない
願い
許されない
わがまま

マケドニア
天駆ける
竜の国

マケドニアの華
炎のように美しい
あの

病床の国王に
代わり 国の表に
立つ第一王子
ミシェイル殿下

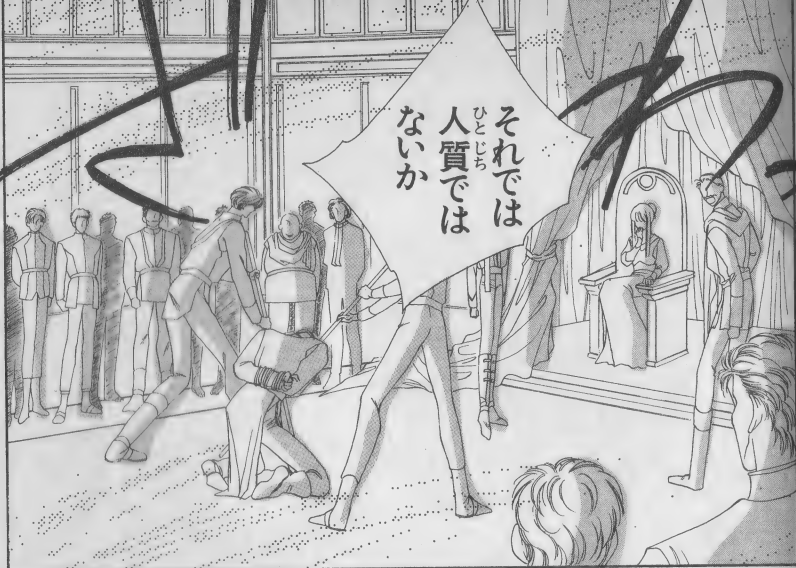
王子の手腕で
マケドニアは
ドルーアの中核を
成すまでになり

妹君の第一王女
ミネルバ姫率いる
白騎士団の強さは
知らぬ者とて
いないほど

そして末妹の
マリア姫は

戦争の火の粉から
遠ざけるために
マケドニア城の東
ドルーア城へと

それでは人質ではないか

ミシェイル殿下が国のため　そして真にマリアさまのためになされたことだッ

静まれ　ニーナ姫さまの御前だぞ

さすがに竜人族ともなれば用心深い

ではマケドニアはやむなくドルーアに荷担を

！

いや　妹姫くらいでは国を売るまい

ハーディン！

マケドニアに
とっても
ドルーアに
とっても
口約束にも
等しい人質です

この戦時下
仮にも国を
率いていこうと
思うならば
ありふれた手段

だが それくらい
思い切れるようで
ないと

マルスどの
貴公も
いずれは国を
背負う身
いつまでも
子供の甘い考えは
通用せぬぞ

ミシェイルさまは
国のためを
思い
だからこそ
ミネルバさまも
マリアさまも

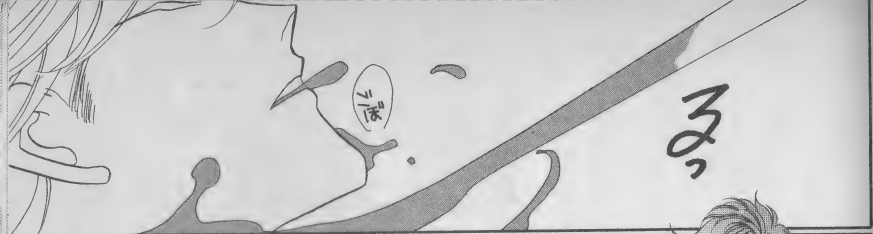
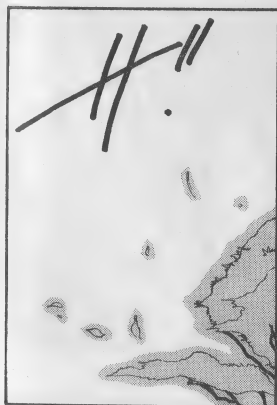
ニーナさま
そろそろ
お暇致します

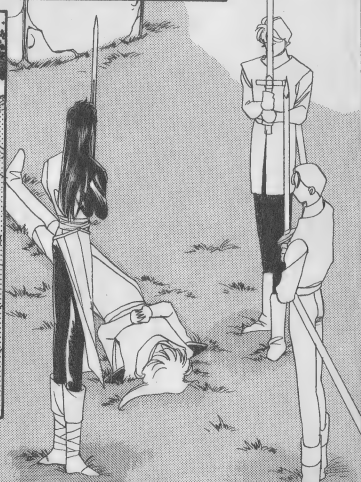
マルスどの
中庭にて
有志が——

ず

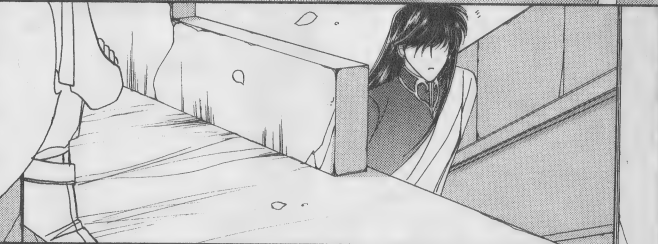
ごぼ
き
貴様
無抵抗の
人間を
それも
アリティアの
やり方か!
そうだ
この…ッ
騎士の最期を
見届けた者が
ただ騒ぐだけか!

チャリ…

ザ…

目の前の死人の血がついた剣でよく黙とうが…

相変わらず言葉の足らん奴だな

とどめを乞われたと何故言えん

見てたようなことを言うな

──！

まあ気づかないような騎士さまたちでもなかろうが

どうだかな

おまた入軍志願者だ

またそういう憎まれ口を

陽が落ちて逆に増えたか

平民も多いが各地で孤軍奮闘していた騎士や勇者も多い

なにしろ聖アカネイアとアリティアとオレルアンが合流したのだからな

こんなところで油を売っていていいのかオグマ

騎士には騎士が対した方がいいんだよ

——思ったより鈍感じゃない

言ってろくそ

騎士が倒れる時支えにするのは剣と誇りだからな

オレルアンの騎士たちの気持ちも判るさ傭兵ごときに出しゃばられちゃあな

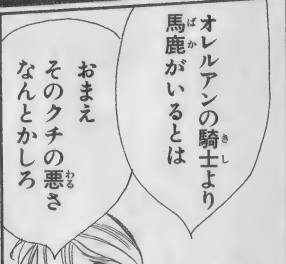
ざわ．

そういった気持ちがおれたちだけに向いていればいいんだが

ふたりの王子さまのごあいさつだ

あちらがオレルアン王弟ハーディン公

そしてアリティアのマルス王子——?

なんとまるで子供ではないか

オレルアンの騎士より馬鹿がいるとは

おまえそのクチの悪さなんとかしろ

だって本当のことじゃねぇか

シーダさまジュリアン!?

遊んでんじゃねぇぞちゃんとレナの手伝いしてんだからなっ

あの水をね

疲れた顔なさっておいでだねぇ

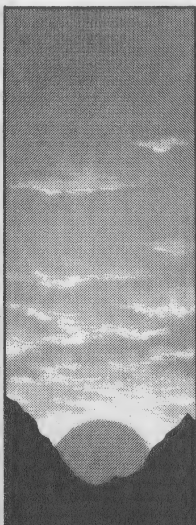
アリティアの大将が

まるきり――年相応の子供だよ

自分にできることはこんなにもなかつたか

言い訳はできない
後悔もしている
時間がない――

マルスさま西日がきつくなって…

アンリの騎士団はねマリク

百年前メディウスが倒れた後に結成されても大陸最強だと言われたそうだよ

それはきっとアンリの騎士団だから

ぼくはもっともっとしっかりしていないとみんなまで頼りなく思われてしまうね

ふう

マルスさま

タメ息つくと一日分寿命が縮まるんだっていいますよ

ギィ

ジュリアン

マルスさまには長生きしてもらわにゃ

だから命の洗濯致しましょう

オレルアン万歳

聖アカネイアよ永遠なれ!

はぐれないように
しろよ
ほら
マリクも！
さらわれて
売られても
知らないぜぇ
高値がつくぞー
そ そんな
危ないところ
なのかっ!?
ちがうよ
マリク
なんて活気が
あるんだろう
マルスの
おかげだよ
弟ってと
かっこいい
あんちゃんって
コトに
なってるからね
敬語使ったり
するとやんごとない方だって
バレちゃうでしょっ
ぼく？
ぼくが
この人たちに
何をしたって？
戦争ったって
大陸全部が
火花散らしてる
わけじゃない
からねぇ

国の間をうまく立ち回ってもうけてる奴だっているくらいだ

実際ドルーア側の国はけっこう平和なはずだしな

圧倒的に優勢だもんなぁ

ジュリアン!

兄弟ゲンカはよくねぇぜ兄ちゃん

悪ィ!

オレルアンはもともと豊かな国だけどな

乾杯!!

我らがオレルアンに力を貸してくれたアリティアに!

伝説の再来に!!

そりゃあないよりある方がいいが食い物がありゃあそれだけで豊かってこたぁねぇだろう?

この街がこの連中が明るいのはそういう訳さ

あんたが
いてくれる
からさ
マルス

最初っから
何かができる
なんて思っちゃ
いなかったろ？
なら力もなくて
当たり前だよ

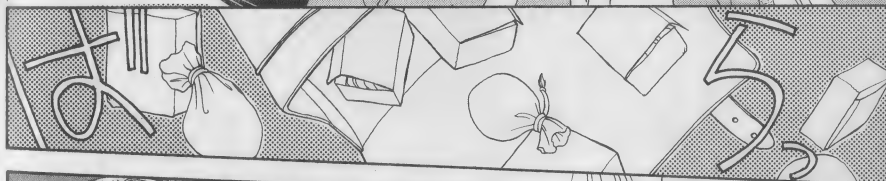
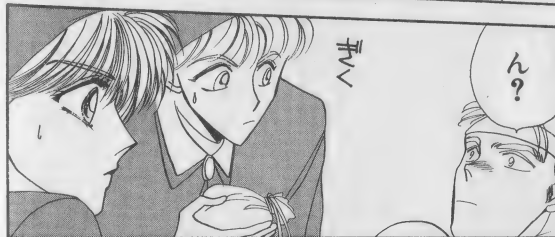
あんたが
ここにいる

そこから
始まる
ことだって
たくさんあるんだ

忘れちゃ
いけない
マルスは
マルス以上にも
以外にも
なれねぇんだ

忘れちゃ
駄目だよ

ぼくの
知ってる
マルス
…もっ

あなただけです
だから耐えられた
だから強くなりたかつた帰りたかつた
他の誰でもない
あなたのためにあなたのためだけに
どしん
おっと
この子供どもっ道の真ン中につったってんじゃねぇよ
ご ごめんなさいっ
ん？
ぎく
なんだぁ本当に子供だなぁ
おう…そうか戦争で父ちゃんも母ちゃんもいなくなったか？

そうなんだよ おっちゃん こっちに遠い親戚がいるってんでタリスから出てきたってんだから泣かせるよなあっ
かわいい兄弟だろっ
こんな子供がたったふたりでかい！
苦労したんだなぁ だけどもう心配いらねぇぞ
なンにも怖いもんなんかねぇからな
今この国にゃあ聖アカネイアのニーナさまと我らが草原の狼ハーディン公と
アリティアのマルス王子までいるんだぜ
そうだ いいモン やろう！
なに？ …石？
ただの石じゃあねぇぞぉ
竜人族の力が封じこめられてるってぇ石なんだ
ええっ!?

竜石？

物知りだな
坊や

目の前で
竜から人間に
変わったのを
見たんだよ

…っていう
店たたみかけてる
小物屋から
もらったんだがな

捨てるっつーからよ

なんか怪しい

夢があって
いいじゃねぇか

まずは信じて
生き残るこった
これから
これからだよ！

すごいもの
もらっちゃったなぁ

大事に
しなきゃね
マリク
ジュリアン

…ああ
やっぱり

いつでも
最初から
一歩ずつ
少しずつ
確かにたしかに

あんたは
おれたちの
王子さまだねぇ

強くなって
みせる

誰よりも
誰よりも

アリティアの名にさえ
負けぬよう

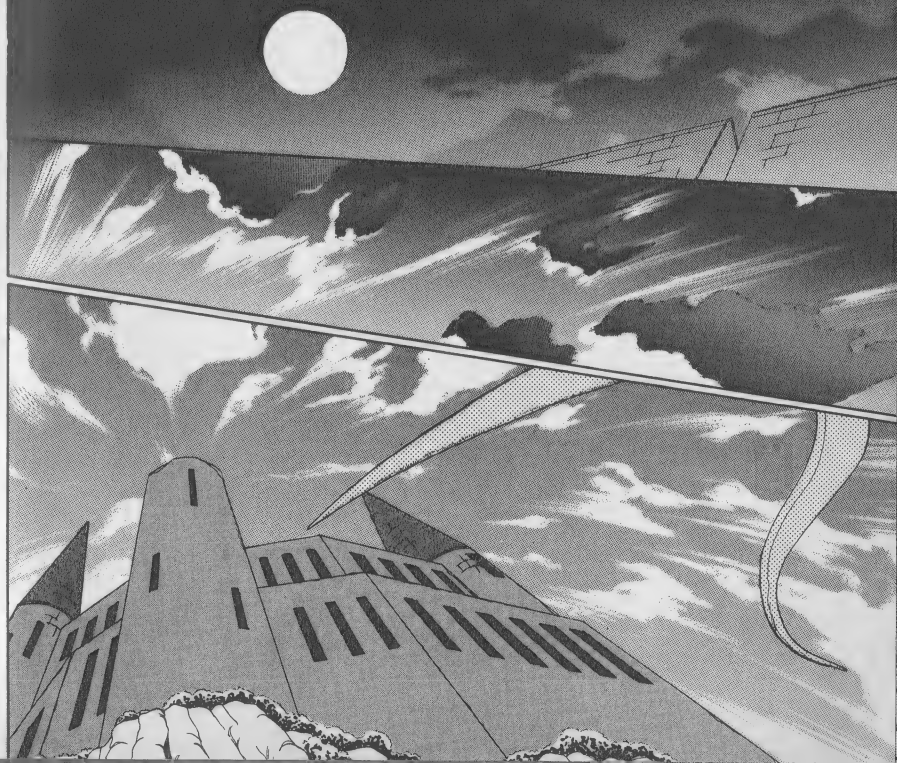
そら あれは
マルスさまの
笑い声では
ありませんか

おお
まさしく

ジュリアンめ
剣も持たず
飛び出しおって
万が一の時のために
儂がこうして
後をつけて
おるからよい
ようなものの

それにすら
気づかぬの
だから
まったく…

…アリティアの
騎士も馬鹿か

いや おれたちの
尾行が上手
すぎるんだって

ハーディンさま
マルスさま
西の空に竜が!?
夕陽に紛れておりましたが確かに
増援部隊が待機していただとぉ!?
おめおめと本陣に戻れるものか
戦うために天に舞った以上マケドニアの竜騎士に敗北は許されない!
ならば残る道は
特攻

敗北は許されぬと！

誠に誇り高い騎士精神でございます

敵ながら感服致しました

マルスどの以下アリティア軍が最初から参加してくださいますゆえ戦力の差は歴然としておりますが

全力でもって戦うことが彼らのその精神に応えることになるでしょう

——敗者には

アカネイアの光を受けることが許されぬのでしょうか

——！

ざわっ

彼らが生き延びたなら

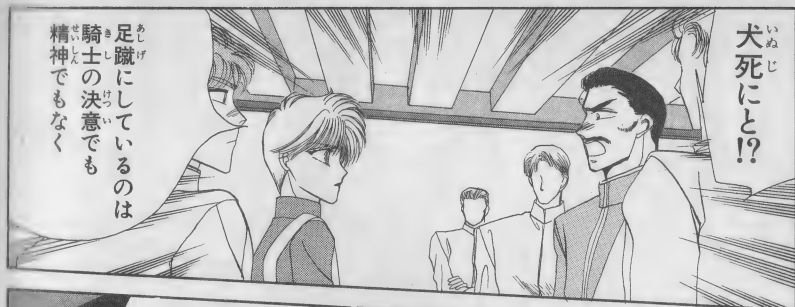
聖アカネイアのニーナ姫 あなたさまが彼らを許してやってはいただけないでしょうか

アカネイアの光をその身に受けることを

御武運を オレルアンとアリティアと

そしてマケドニアの騎士たちよ

どういうことかマルスどの 騎士の決意を足蹴になさるおつもりか

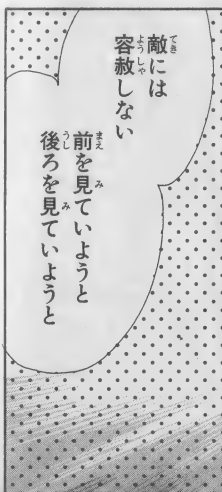
犬死にをさせたくないのだ

犬死にと!?

足蹴にしているのは
騎士の決意でも
精神でもなく

生命だ

それより
大事なものが
この世に
あるはずがない

だが過日の
戦いでは
アリティアの傭兵が
敵を背後から
斬って捨てた

彼らは傭兵だから
とでも
言われるか?

その通りだと
言うか?

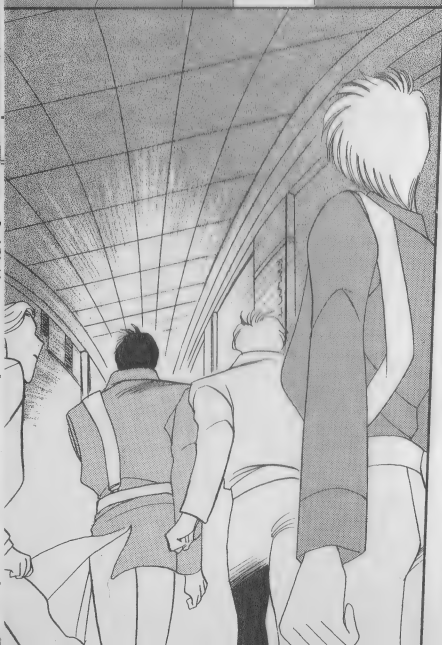
やめろって

そうするよう
望んだのは
この私

我がアリティアの
一員としての
彼らに

敵には
容赦しない

前を見ていようと
後ろを見ていようと

だけど彼らとて
アカネイアの光を
受けることを
許されていたはず
ドルーアに
与していると
いえど
この大陸に
共に息づく身
騎士も傭兵も
等しい生命だ
甘いな
マルス

怒らせてしまったかな
そうでしょうなぁ
仕方がないでしょう
確かに甘い考えだものね
おまえたちは何故怒らない？
それはハーディン公がオレルアンの騎士で我らがアリティアの騎士だからです
仕方がございません
どう言われようと
でも弱いままじゃいられない
戦って生き抜く
生き残った者が勝ちだよ
生きてこそ

生きていなければ
なんの価値もない
誰も彼も！

百年の恋
生き抜いたのに
実らなかった恋

百年目の恋は

シーダ

えっ

チャラ・

これは

…やっぱり
もう少し
贈り物らしく
すべき
だったかな

この前 街に
出た時に
買ったんだけれど

渡しておこうと
思って

何故
今 この時に
くださるの
ですか

天馬で
戦っている時に
落ちでもしたら
捜せません

そんなことに
なってしまったら
私 気がおかしく
なってしまいます

ですから
今日の戦いが
終わったら
いただきます！

わかった
シーダ

百年目の恋は
まだ
始まったばかり

心を殺して
しまわないよう
生きていてこそ
生きていれば
なんでも
できるわ
そう最初は
信じることから
教えてあげましょう
それすらも
知らない
かわいそうな
あの人たちに
来るぞ
ドルーアに
マケドニアに
栄光
あれ!

騎士は弓手兵を護れ
弓手兵しっかり狙えよ
あ
アリティアの弓手兵か何故射たん！
機を待ってるんですっ
竜の腹を射て！
ばっ
ギリ
ドス！

羽を

どさ

う

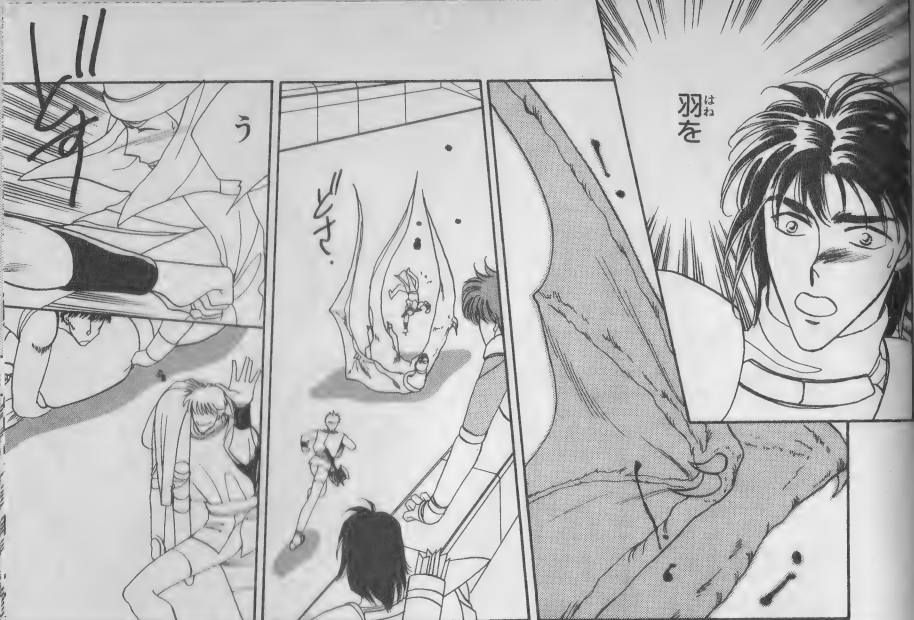
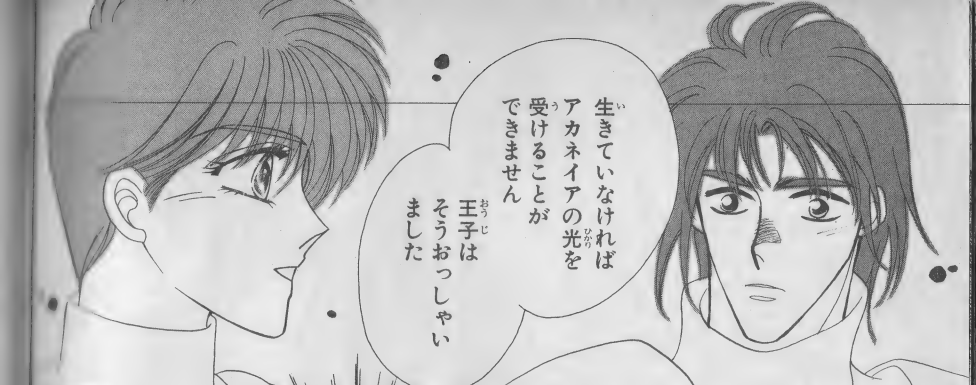
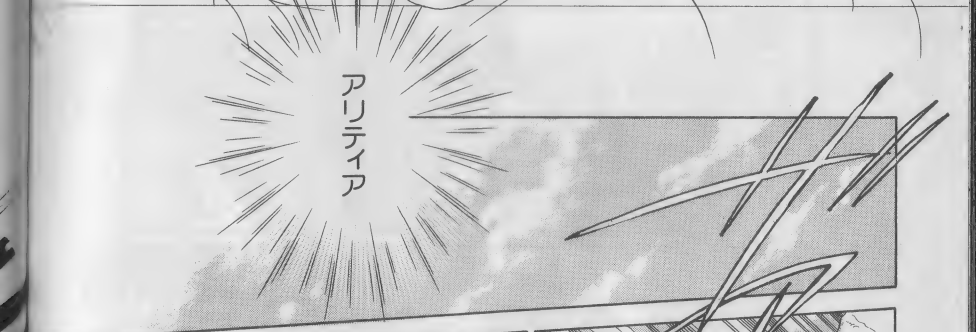
どす

ほ

ああの
羽を広げた時の
つけ根をですね
撃つと竜って
飛び方が
判らなくなる
ようで

落ちるんです

ならどうして
もっと上空の
竜を狙わない

高い所から
落ちると
死んでしまう
でしょう
騎士も竜も

生きていなければアカネイアの光を受けることができません

王子はそうおっしゃいました

アリティア

さすが傭兵剣技は超一流だな

ばーん!

殺れる

……!

こんな時に
格好つけて
どうするんだ
貴様

ぱら。

そう言いたいのは
おまえだけじゃ
ないらしいぞ

そうだな

斬・る・方に
手が動くから
切り返しに
気を取られて
この様だ

何故
斬らぬ！

仕える主君を
まちがえた

アリティア
…か…？

マルスどの

未だこの期に
及んで
甘い考えを
捨てられぬか

甘くなんかない
殺すより
生かす方が
難しい

何倍も
何十倍も

殺すことばかり覚えたくない

この少年は気づいている

伝説を背負うということの重さを

どけどけぇ

貴様らに用などない

ドルーアに
マケドニアに
栄光あれ

城につっこむ
気だ

ニーナ姫を
道連れにできれば
上々よ

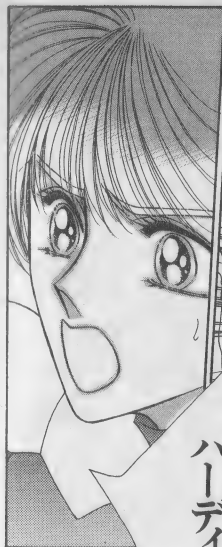
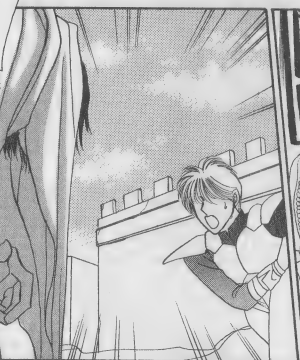
はッッ

！

ハーディン!!

怪我は

大事ない

ニーナ姫さまを
道連れなどと

城の…何処に
おいでになるかも
知らぬくせに

もうすでに心が半分死んでいたとしても

私はあの言葉を許しはしない

アカネイアの光を受けることが許されていようと騎士であろうと

ニーナさまのお命を奪おうとする輩は誰ひとりとして例外なく

それが私の敵だ

貴公とは道を違えることも多いだろう

貴公が往く道は それはきっと

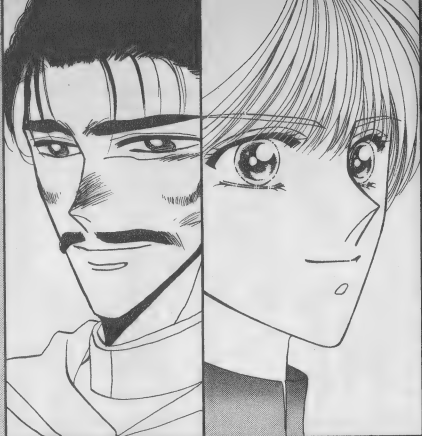
誰もが望む

理想の王国

──険しい道だ マルスどの

生きてさえいれば 歩いてゆくことも できるから

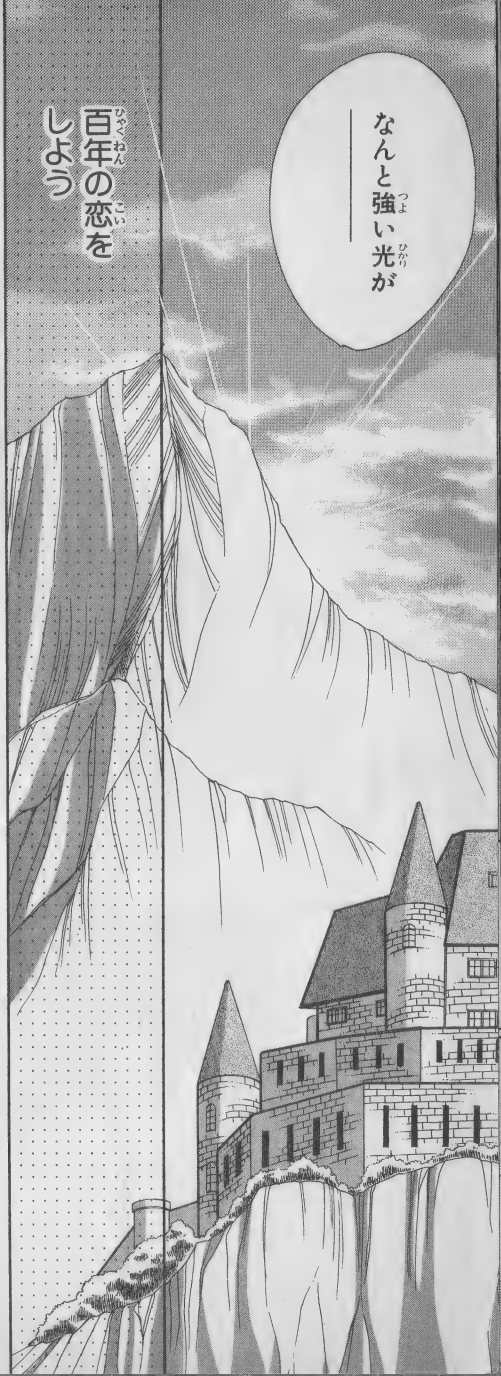
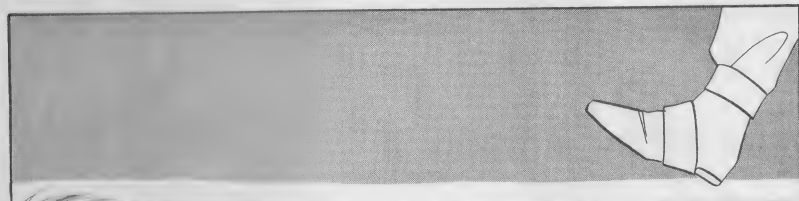
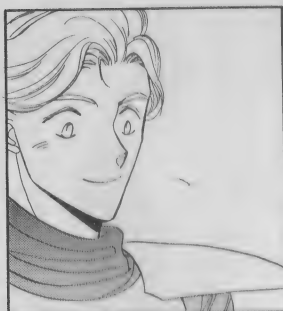
では
共に往こう

アカネイアの光の
導くままに

ああ

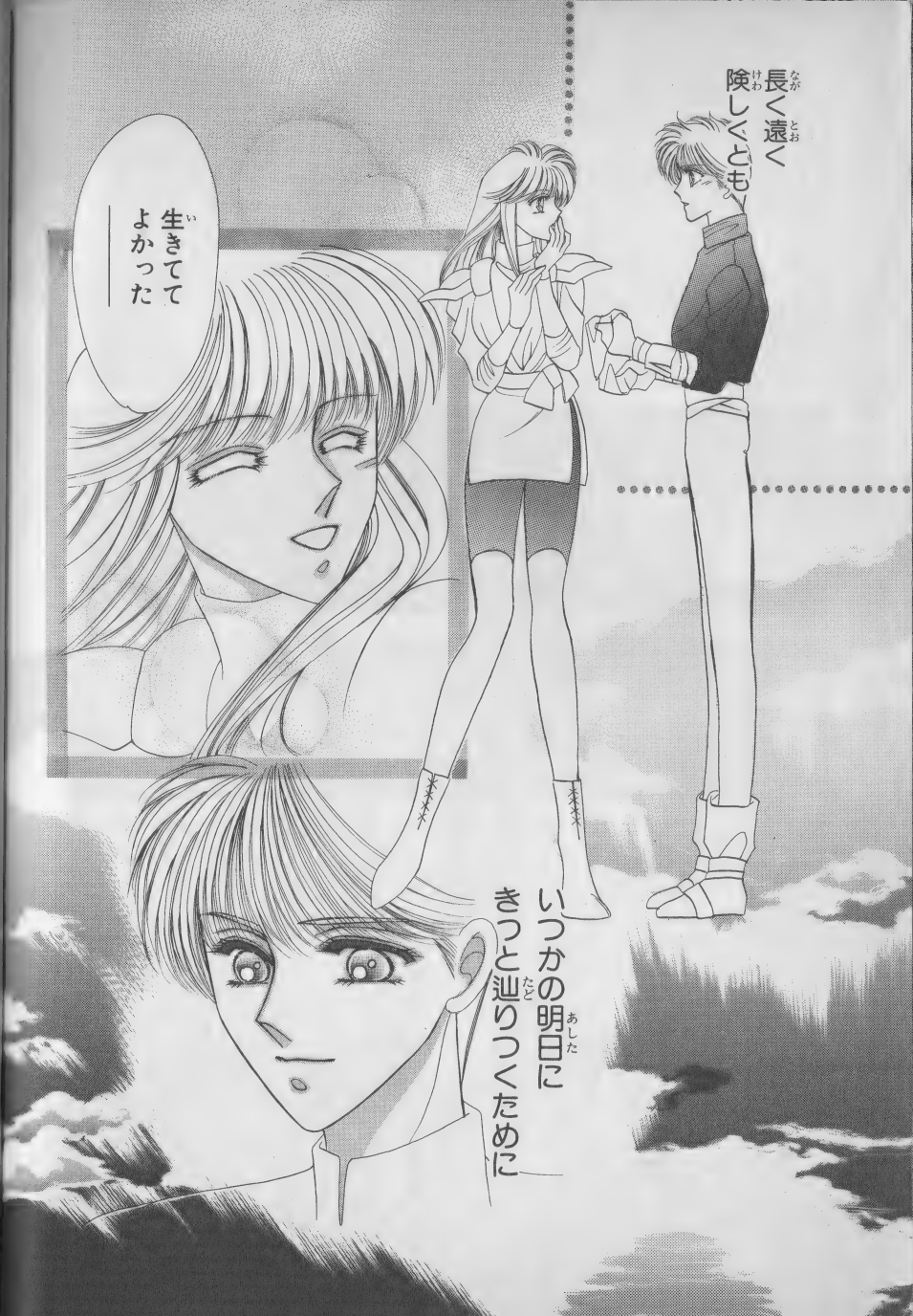
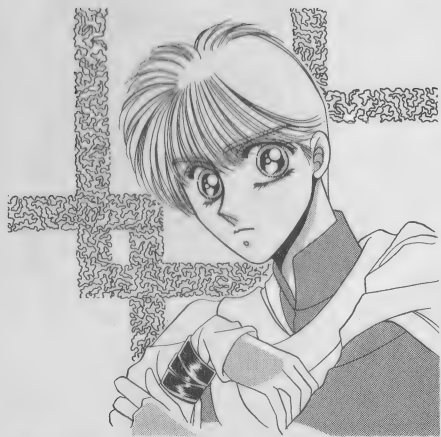
クルル・

なんと強い光が
——
百年の恋をしよう
約束の地に向かって
これくらいのけがに術使ってどうすんだよっ
薬ってもんがあるだろうレナはもうっ
これで足りるか

充分だよ
ありがとう！

道を往こう

長く遠く
険しくとも

生きてて
よかった
——

いつかの明日に
きっと辿りつくために

★第5話／連壁★おわり

AMUSE PRESS③

こんにちは
あるいは
はじめまして
「ファイアー・エムブレム」
第2巻です

1巻から
ずいぶん
間があいて
しまって
いやー
忘れられて
いたりして
ひー

↗ホントは髪が緑のマリク。

マルスさまとおないどし？
えにちわー
いやマルスさまもそんなに大きくはないが…
ほら成長期に砂漠の国に行ったから食べ物とかの関係で
きっと
あーっ
ごちそうですよ——っ♡
ほーらこんなに太ってる—！
わっ
エイナスはゲームには全然出てこない人物
完全なオリジナルです
塩で焼くのがいちばんだよね♡
さすがマルスさまグルメですね。
王子…
じゅーーっ
というより第3話「風刃」はゲームにはほとんど存在しないストーリー
プレイしたことのある人には今さらですが。
マリク登場は本来ならMAP④
ハーディン登場はMAP⑤になります
…

あの頭の布は何の意味があるんだろう…

遠い異国の地のさる王は

美しすぎるために戦場に出る際には

その顔を恐ろしい仮面で隠したという

――美しすぎるがために

なぜそんなに今日は眉間にシワがよっておられるのかな？マルスどの

…いえ

お話はまだまだ序盤の序といったところ

「世界」だけでなく「登場人物の世界」も描いていきたいと思っています

これからもよろしくお願いします♡

✿AMUSE PRESS-③ ✿おわり

初出

ファイアーエムブレム 第3話／風刃
1993年増刊「ASUKA」ファンタジーDX春の号掲載

ファイアーエムブレム 第4話／狼拠
1993年増刊「ASUKA」ファンタジーDX初夏の号掲載

ファイアーエムブレム 第5話／連壁
1993年増刊「ASUKA」ファンタジーDX夏の号掲載

AMUSE PRESS③
描きおろし

ファイアーエムブレム2　あすかコミックスDX

著者――佐野真砂輝＆わたなべ京

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
振替／東京3-195208 電話／編集部03-3222-7966 営業部03-3817-8521

装丁――末沢瑛一

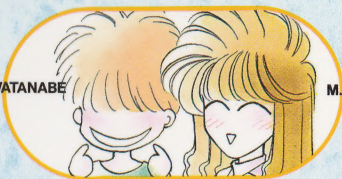
印刷――株式会社廣済堂

製本――株式会社廣済堂

初版発行――1993年11月1日

ISBN4-04-852354-6 C0079
Printed in Japan

PROFILE

K. WATANABE　M. SANO

佐野真砂輝

☆さのまさき
12月19日生まれのB型
東京都出身

わたなべ京

☆わたなべきょう
8月16日生まれのO型
大阪府出身

デビュー作は「スプラッシャー」。

佐野真砂輝&わたなべ京の本

あすかコミックス
トーキョー・ガーディアン1～2
あすかコミックスDX
ファイアーエムブレム1～2
ファイアーエムブレム外伝

9784048523547
1910079005204
ISBN4-04-852354-6 角川書店
C0079 P520E 定価520円[本体505円]

百年の時を超え、反ドルーアの意志の許に力が集う。
復活した竜人族を相手に、マルスは伝説を背負えるか――!?
ファンタスティック・グランドロマン、緊迫の第2巻!!